

第Ⅲ章 A地区の調査

第1節 A地区の概要と調査方法

1 地区の概要

A地区は、既に史跡に指定されているB地区の北に隣接する地区で、遺跡範囲の北東端に位置する。本地区の地形は、遺跡の東を南北方向に走る尾根筋とその西裾に広がる比較的なだらかな丘陵部に分かれる。東尾根筋の頂上部と丘陵部との比高差は約50mであり、その間に存在する急峻な斜面が遺跡の中心に位置する盆地状地形の東を画している。丘陵部は、掌指状に広がる何本もの尾根とその間に存在する谷が交互に連なる複雑な地形を呈する。

現在、地区の大半が山林となっているが、丘陵の裾部は開墾され、現在も水田として利用されている。山林となっている範囲についても、かつては果樹園等として利用された形跡が認められ、その範囲は東の尾根頂上部にまで及ぶ。

本地区の地質は主に花崗岩を基盤とし、山林の大半で風化花崗岩からなる真砂土の堆積が認められ、大きな花崗岩の転石が露頭する場所が各所に存在する。その周辺には多数の切り石が集積する状況が認められ、かつて石切り場として利用されたことを知ることができる。また、山林の中には地表面に円礫を含む砂層や粘土層が露頭する箇所が認められ、そこでは基盤層上に堆積する大阪層群の存在を知ることができる。砂の露頭箇所では、地面を掘削した痕跡が認められ、砂の採取が行われていたことを知ることができる。これらのことから、現在山林となる範囲もかつては多くの人が入り、活動した場所であったことを知ることができる。

隣接するB地区の尾根では、平成30（2018）年度の調査で鍛冶工房建物跡が検出されており、鉄器を製作していたことが確認された。本地区における調査歴は、平成4（1992）年度に実施したほ場整備事業に伴う発掘調査があり、丘陵裾に開墾された水田部分で堅穴建物跡などの遺構が検出された（図3-1）ことから、本地区にも弥生時代の集落範囲が広がっていることは明らかである。また、堅穴建物跡の北約15mの地点で検出した幅6.0～7.0m、深さ1.8mの大溝SD-9201は、遺物が出土せず時期を確定するに至っていないが、その東端は山林部へ伸びる様相が認められていた（図3-1）。これらのことから、山林部における遺構の有無を確認することが課題となっていた地区でもある。

2 調査方法

今回の調査は、課題となっていた山林部での遺構の有無やその性格などを確認することを目的として実施した。令和2（2020）年度の18次調査では、比較的なだらかな地形を呈する丘陵部を対象として、尾根頂上部や斜面に認められる平坦部を中心に、幅2m及び1mのトレンチ12本（Tr-2001～2012）を設定して発掘調査を開始した。その内、Tr-2007、2008、2011については、検出した遺構の性格や規模などを確認するため、範囲を拡張した。また、当初調査を予定していたTr-2006、2009は、周辺トレンチの状況を勘案し、掘削を取り止めた。その結果、令和2（2020）年度の調査面積は123.7㎡となった（図1-4）。

また、令和3（2021）年度には21次調査として、Tr-2003及び2008で検出した遺構の性格を確認する

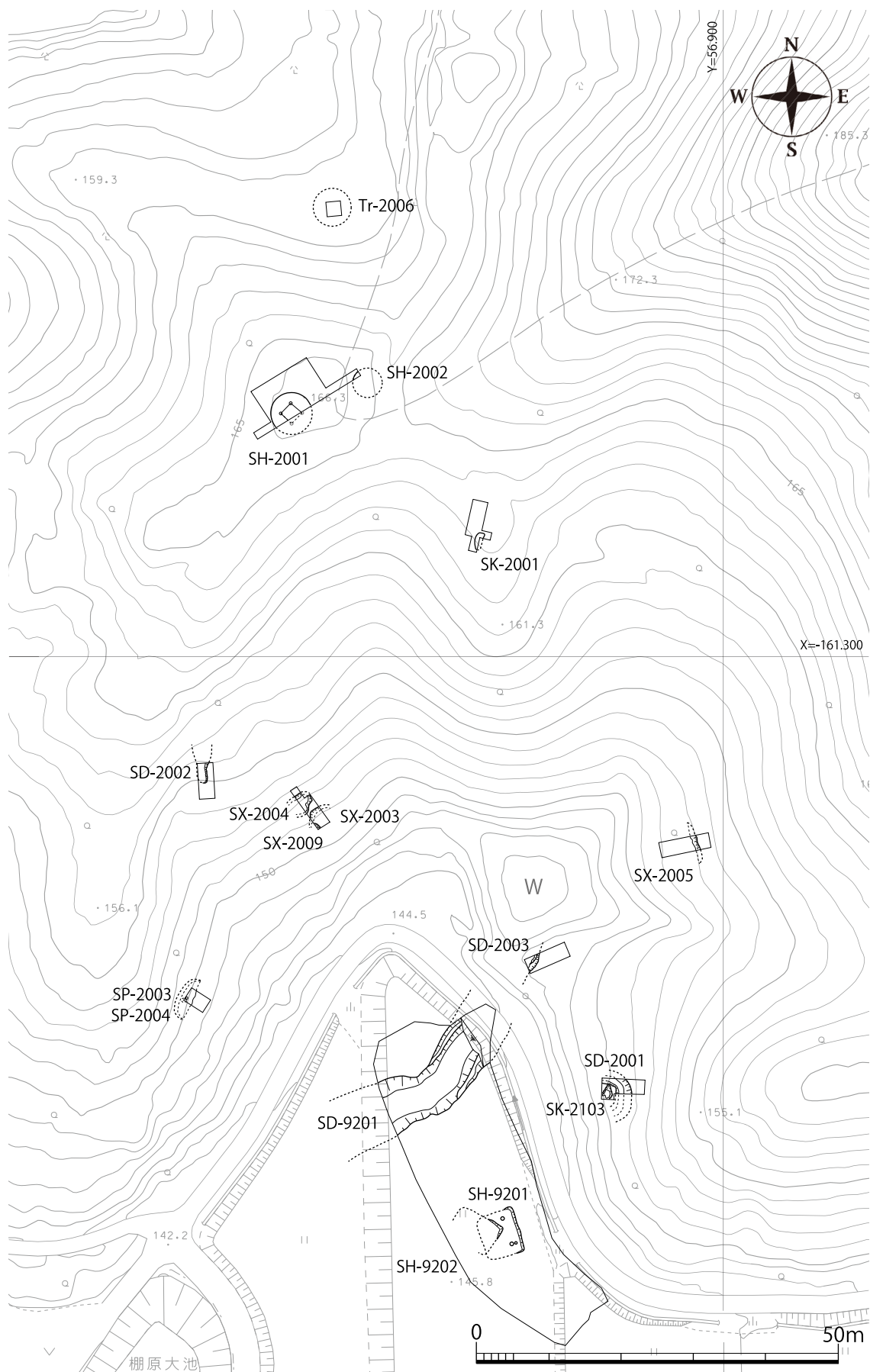


図3-1 A地区の主な遺構配置図

ため、一部範囲を拡張した調査を実施した。その面積は42.1㎡である。その際、当該年度に拡張した範囲はそれぞれTr-2003拡及びTr-2008拡と呼称した（図1-4）。

令和4（2022）年度の23次調査では、前年度までの調査で本地区においても弥生時代の遺構が確認されたことを受けて、さらに北への遺跡の広がりを確認する目的で、3か所の調査区（Tr-2206～2208）を設定して発掘調査を実施した。さらに、当該年度の調査では、東の尾根上への遺跡の広がりを確認する目的で、5か所の調査区（Tr-2201～2205）を設定した（図1-4）。その合計面積は36.8㎡である。

検出した遺構から時期を判断することができる土器が出土しなかったTr-2003、2010、2011においては、出土した炭化材の放射性炭素年代測定を実施することで遺構の年代を確認することとした。また、検出した竪穴建物跡の床面に屋根の構造材と想定される炭化材が残されていたTr-2008については、建物の時期を特定するための放射性炭素年代測定及び屋根に用いられた材木などの樹種を特定するための炭化材樹種同定分析を実施した。なお、本遺跡が鉄器生産に関わる遺跡であることを勘案し、竪穴建物跡等の遺構掘削にあたっては、微細な鉄器の有無を確認するため、遺構埋土をふるいにかけて、磁石を用いた鉄器の検出作業を発掘作業と並行して行った。

第2節 各トレンチの調査成果

1 Tr-2001

（1）調査区の概要

東西方向に伸びる尾根頂上部の平坦部に設定したトレンチである。尾根幅は約10m、長さ30m弱の瘠せた尾根で、頂上の平坦部の標高は160m、丘陵裾からの比高差は13mである。尾根筋に並行して、幅2m、長さ10mのトレンチを設定した。

トレンチの中央部で浅い落ち込み（SX-2001）を検出したが、樹木の根の痕跡の可能性が高い。本調査区では、土器などの遺物は出土しなかった。

（2）基本層序

表層は厚さ5cmの腐葉土（1層）が全面を覆い、その下に花崗岩風化土である明黄褐色砂質土（2層）、黄褐色砂質土（3層）、褐色砂質土（4層）が堆積し、黄褐色土（6層）に至る。6層は地山であり、花崗岩の岩盤及び風化土で構成される。トレンチ西端では2～4層は検出できず、表層の腐葉土直下に地山が存在する。トレンチ中央部で検出した落ち込みSX-2001は、2層及び4層下で検出した。

（3）遺構

SX-2001（図3-2）

トレンチ中央部で検出した半円形の落ち込みで、北半は調査区外へ広がる。全体としては円形か楕円形に近いが不定形である。調査区北壁断面での直径は3.54m、深さ20cmで、底はわずかな起伏はあるが、ほぼ水平である。落ち込み内には、にぶい黄褐色砂質土（5層）が堆積する。遺物は出土しなかったことや不定形な形状から人為的に掘り込まれたものではなく、樹木の抜根痕跡である可能性が高い。

2 Tr-2002

(1) 調査区の概要

丘陵裾に存在する平坦部で、造成された可能性が高い。ほとんど水平な地表面は、農地として利用されていた土地であると考えられる。北側には、丘陵部から流れ出す谷筋が存在し、平成4（1992）年度で検出した大溝SD-9201は、本調査区から谷方向に向かって伸びる可能性がある。調査地の標高は148mで、大溝が検出された標高147mの水田との比高差は約1mである。

幅2m、長さ6mの東西方向に長いトレンチを、平坦な調査地を縦断する形で設定した。その結果、調査区の両端で落ち込みを検出した。その内、トレンチ西隅で検出した溝SD-2003は、方向や形状から大溝SD-9201に続く可能性がある。

本トレンチでは、表土直下のにぶい黄褐色砂質土（4層）やにぶい黄橙色砂礫（5層）、褐色砂質土（18層）など、調査区の上層に堆積する土層から弥生土器片が出土したが、後世に混入した遺物の可能性が高く、検出した落ち込みも弥生時代の遺構とは断定できない。落ち込み内に堆積する土層は、自然堆積の様相は薄く、人為的な整地土の可能性はある。本地が農地として造成された際の整地土の可能性も否定できない。

本調査区では、約30点の弥生土器片とサヌカイト片が1点出土した。土器は何れも小さな破片であり、

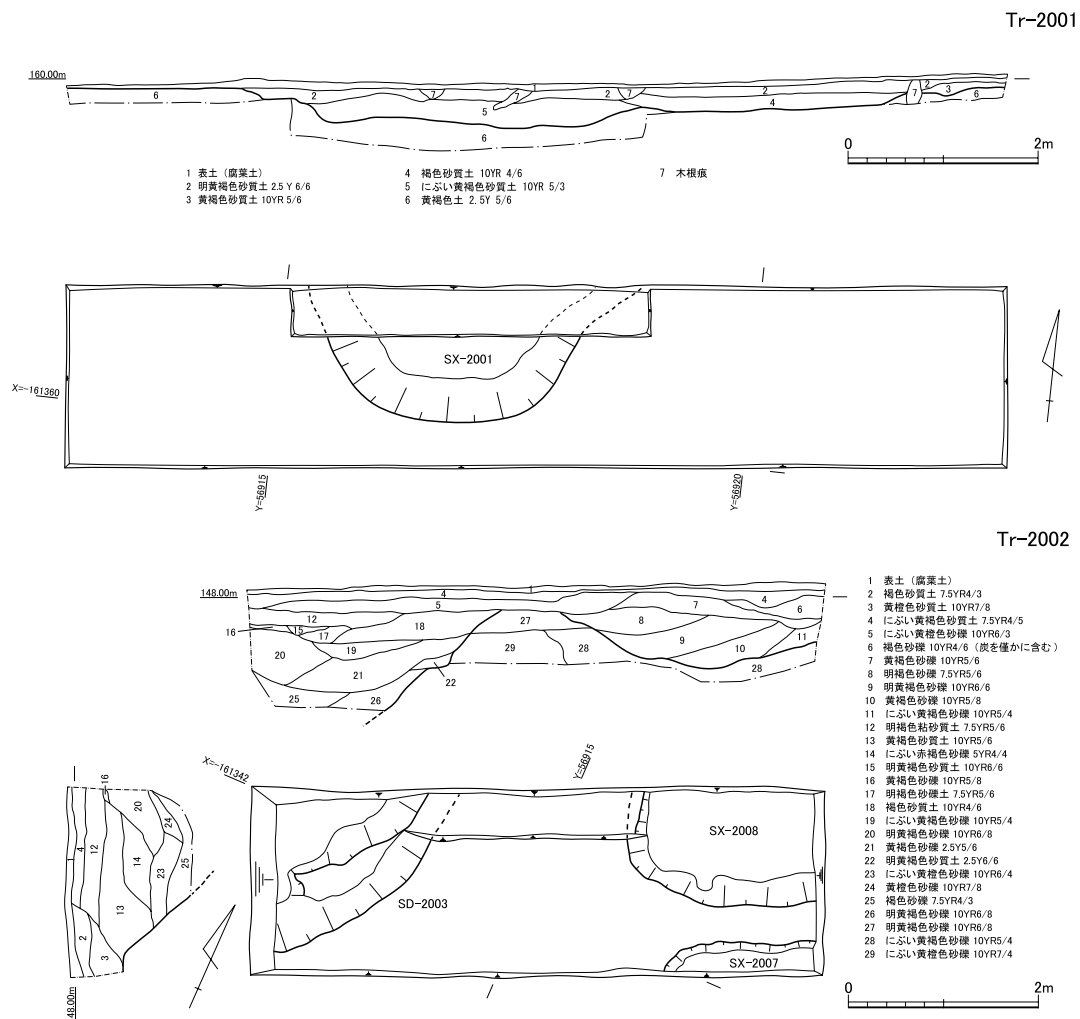


図3-2 Tr-2001・Tr-2002 実測図

図化できる土器は存在しない。

(2) 基本層序

表層には、厚さ10cmの腐葉土を中心とする表土（1層）が存在し、その下に厚さ20～30cmの砂礫層（4～7層）が堆積する。これら土層は自然堆積ではなく、人為的に造成された土層の可能性が高い。これら土層の上面から落ち込む土層（2・3層）が確認されることから、本調査地に堆積する土層は幾度となく攪乱を受けているものと考えられる。中央部では、トレンチ全体に広がる明黄褐色砂礫層（27層）及びその下に存在するにぶい黄褐色砂礫層（28層）、にぶい黄橙色砂礫層（29層）が検出され、確認された落ち込み（SD-2003、SX-2008）は、その上面から落ち込むことを確認した。

(3) 遺構

SD-2003（図3-2）

トレンチ西隅で検出した落ち込みである。平成4（1992）年度で検出した大溝SD-9201と同一の遺構である可能性が高いことから今回も溝とした。明黄褐色砂礫層（27層）上面から落ち込むことが調査区北壁の土層で確認できる。検出した範囲での幅は1.6m、深さが69cmを測る。規模が大きいこと、掘り方が急傾斜であり、途中にステップ状の平坦部が存在すること、砂礫土が幾重にも複雑に重なる（12～26層）堆積状況、遺物が出土しないことなどは、平成4（1992）年度で検出した大溝SD-9201の特徴と一致していることから同一の溝であることが想定できる。掘削深度内では、水が流れたような形跡は見られない。上層から弥生土器片が出土したが、後世の混入である可能性が高く、これが弥生時代の遺構であるかどうかについては断定できなかった。

SX-2007（図3-2）

トレンチ東隅で検出した落ち込みである。この落ち込みは、表土下に堆積する4層直下から落ち込んでおり、SD-2003及びSX-2008よりも新しい時期のものであることが確認できる。検出した範囲での深さは66cmで、堆積土は3層に分かれ、最上層から弥生土器片が出土した。

SX-2008（図3-2）

トレンチ北東隅で検出した楕円形の落ち込みである。検出範囲での径は2.35m、深さ39cmであるが、北及び東は調査区外に広がるため、全体の形状や規模は不明である。SD-2003と同じ面から落ち込むが、角度は溝としたSD-2003に比べ緩やかであり、深さも浅いことから性格は異なるものと推測できる。

(4) 遺物

石器（図3-3 S1）

S1は、3.5cm×4.2cm、厚さ1.2cmの小さな剥片である。母岩から一度の打撃によって剥離されたことがわかる剥片であるが、剥離面には使用痕や加工痕は認められない。背面は原礫面となる。石材は、サヌカイトとみられるが、原礫面の風化度合いは弱く、剥離面が濃い黒色を呈することから、玄武岩の可能性もある。

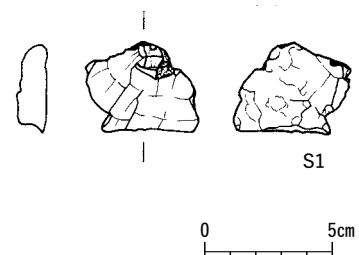


図3-3 Tr-2002 出土石器

3 Tr-2003・2003 拡

(1) 調査区の概要

Tr-2001を設定した東西尾根の先端からおよそ10m下った斜面に存在する約5m四方の小さな平坦部に設定したトレンチである。平坦部の標高は約149mで、斜面を削り出して造成したような形状を呈する。トレンチの幅は2m、長さ5mで、斜面から平坦部にかけて、斜面に直交する形で設定した。

調査の結果、斜面と平坦部との境で、平坦部を囲むように馬蹄形に掘られた溝（SD-2001）を検出した。溝に囲まれた範囲には焼土の集積が確認された。焼土の広がりや遺構の性格を確認するため、翌年度にトレンチの一部を拡張（Tr-2003拡）するとともに、焼土が集積する範囲の断ち割りを行った。その結果、焼土が集積する範囲は盛土によって形成されていることが確認できた。

これら遺構の時期を判断できる土器などの遺物が出土しなかったため、焼土内や溝から出土した炭化物の放射性炭素年代測定を実施した結果、平安時代の遺構である可能性が高いことが確認できた。

(2) 基本層序

表層には、腐葉土が堆積する厚さ5cmの表土（1層）が存在し、その下に堆積する黄褐色砂質土（2層）下で地山である明赤褐色粘質土（18層）を検出する。地表面がほぼ水平な平坦部は、およそ30°の傾斜を持つ斜面裾の傾斜が緩やかな場所に約70cmの土が堆積して形成された地形であることが確認できた。この堆積土は、地山直上に黄褐色粘質土（17層）、その上に炭化物を多く含む褐灰色粘質土（15層）、にぶい黄橙色砂質土（14層）、褐色砂質土（13層）の順に堆積しており、その中央付近に深さ15～20cmの浅い土坑（SK-2103）が存在する。土坑には、厚さ約10cmの赤褐色の焼土（12層）や拳大の焼土塊が堆積する。なお、13～15層・17層の断ち割りを行った断面では、黄褐色粘質土（17層）上面から落ち込

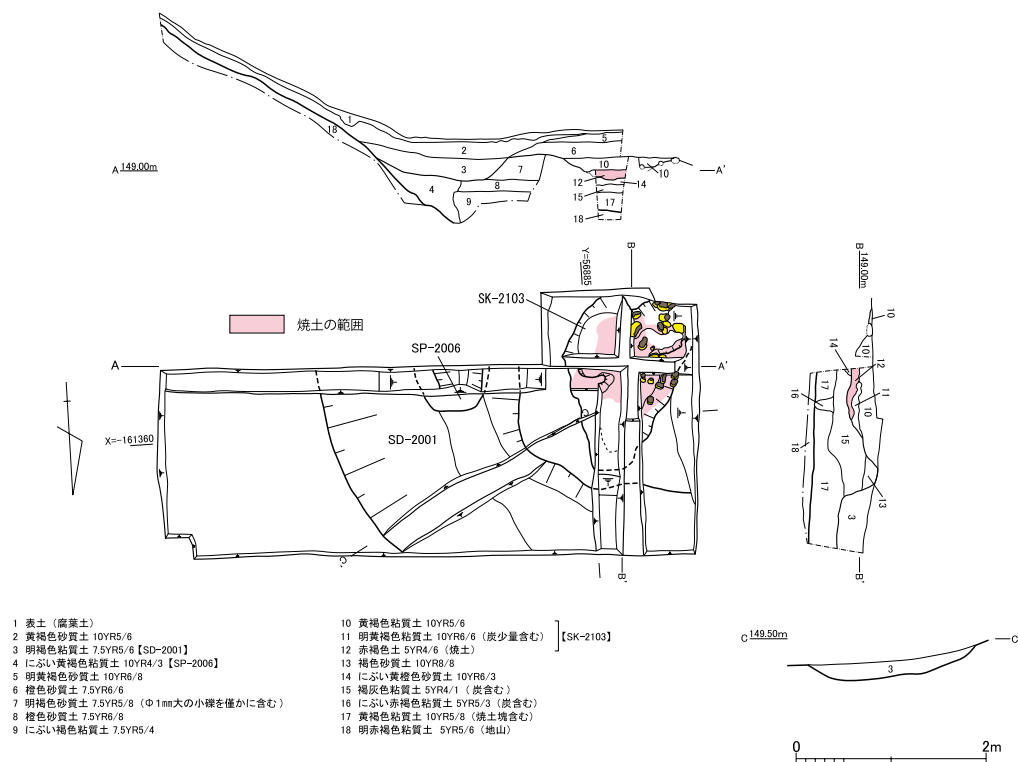


図3-4 Tr-2003・2003 拡 実測図

むピットの存在を確認した。ピット内に堆積する土層（16層）にも炭化物が含まれる。

なお、13～17層で構成される各堆積土がおおよそ30°の地山の傾斜面とは異なる水平に近い堆積状況を呈すること、その中に炭化物が含まれることなどから人為的な盛土の可能性が高いものと想定される。しかしながら、今回の限られた調査範囲の成果からはその目的や性格を判断することは難しい。

（3）遺構

SD-2001（図3-4）

焼土が集積する土坑（SK-2103）を囲むように巡る溝である。最大幅2.08m、深さ17cmを測る。掘り方はなだらかで、断面は船底状を呈する。両端は調査区外に伸びるため全様は不明であるが、馬蹄形に巡るものと想定できる。細礫を含む明褐色粘質土（3層）が堆積するが、水が流れたような形跡は認められず、土器などの遺物も出土しなかった。

なお、溝中央部のトレンチ南壁際で、直径58cmのピット（SP-2006）を検出した。壁際で断ち割りを行ったところ、深さは50cm以上であるが、断面は不定形で先端部が次第に細くなっていくことから、木の根の痕跡と判断した。ピット内からは、小さな炭化物が出土したが土器などの遺物は出土しなかった。

SK-2103（図3-4）

溝（SD-2001）に囲まれた堆積土中央に存在する土坑であり、これら溝と土坑、さらに堆積土は相互に関連する一体の遺構である可能性もある。

平面は北東から南西方向に長軸を持つ楕円形で、検出した範囲での長軸が1.5m、短軸が1.2mである。深さは最深部で33cmを測り、南西方向に深くなる。底には約10cmの厚さで焼土が堆積しており、焼土上面には拳大の焼土塊が多数認められた。焼土塊は、高温の熱を受けた粘土が硬く焼け締まったもので、橙色を呈する塊の一部が黒く焦げた様相を呈する。黒く変色する部分の向きは一定せず、不規則な堆積状況であることから、高温の熱を受けた粘土構造物が崩壊して堆積した可能性が高い。焼土の上には、炭化物を少量含む明黄褐色粘質土（11層）、その上に黄褐色粘質土（10層）が堆積し、焼土が堆積した後に埋まった様相が看取できる。

これらの遺構からは、焼土や炭化物以外の遺物が出土しなかったことから、現状ではどのような機能を有する遺構であるのかを断定することは困難である。なお、盛土及び溝から出土した炭化物の放射性炭素年代測定の結果は、 $BP1040 \pm 25$ 、 960 ± 25 の年代を示していることから、これらの遺構は平安時代のものである可能性が高い。

4 Tr-2004

（1）調査区の概要

丘陵中腹の標高152mの地点に存在する平坦部に設定したトレンチである。トレンチの幅は2m、長さ7mで、斜面に直交する形で設定した。

その結果、平坦部は斜面を削り出して設けた人為的な地形であることが確認できた。削り出した地山上面から弥生土器が出土したことから、弥生時代の段状遺構（SX-2005）であると判断した。

（2）基本層序

表層には、厚さ5cmの腐葉土（1層）が存在し、その下に灰褐色砂質土（2層）、黄褐色砂質土（3層）

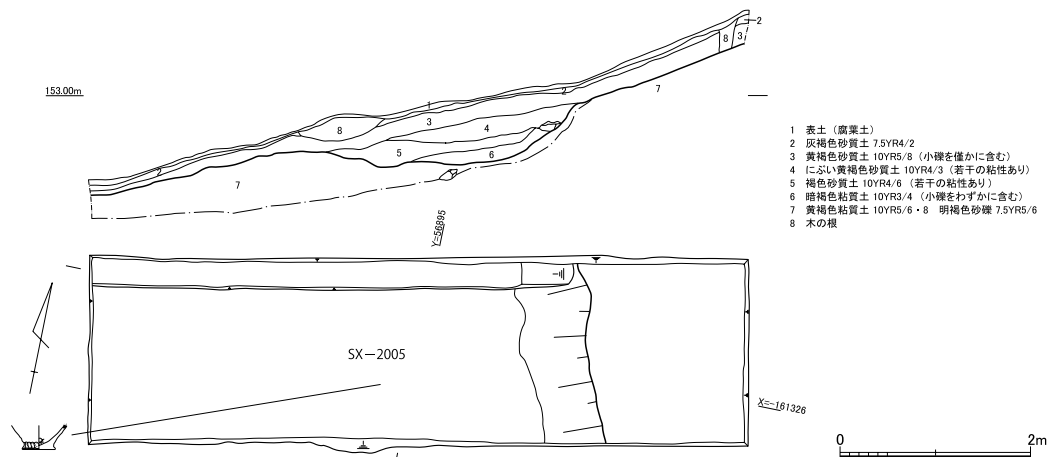


図3-5 Tr-2004 実測図

が堆積し、地山と考えられる黄褐色粘質土・明褐色砂礫（7層）に至る。3層下に存在する7層を掘り込む形で段状遺構（SX-2005）は形成されている。2層、3層のほか、段状遺構内に堆積する4～5層から弥生土器が出土している。

（3）遺構

SX-2005（図3-5）

約20°の斜面を削り込み、幅2.7mの平坦面を形成する。平坦部はほぼ水平で、掘り込みの深さは66cmである。検出した平坦面でピットなどの遺構は確認できなかった。堆積土は3層に分かれ、上層のにぶい黄褐色砂質土（4層）、中層の褐色砂質土（5層）から弥生土器が出土した。

（4）遺物

弥生土器（図3-6 1～3）

2～5層から約30点の弥生土器が出土したが、いずれも小さな土器片であり、図化できた土器は甕の底部3点である。1と3は底径5cmを超える大きな底部で、外面に指押さえの痕跡を残す。1の体部は斜め上方に直線的に立ち上がり、内外面ハケ又は板ナデ調整である。

1は、段状遺構の平坦部上面の5層から出土し、3は3層から出土した。2は排土中の土器である。

5 Tr-2005

（1）調査区の概要

2本の尾根に挟まれた谷筋に設定した2×2mの調査区である。深さ1mの時点で湧水が激しく、それ以上の掘削ができなかった。遺構や遺物は出土していない。

（2）基本層序

腐葉土を含む厚さ15cmの表土（1層）の下に、斜面の傾斜に沿って堆積する砂質土及び砂礫層を5層（2～6層）確認する。厚さ60cmの黄褐色砂質土（5層）、灰色砂礫層（6

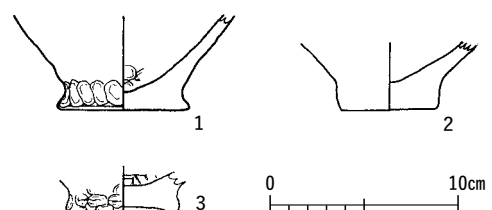


図3-6 Tr-2004 出土土器

層)は湧水が激しい。これらの土層は、谷部に堆積した土層と考えられる。

6 Tr-2007

(1) 調査区の概要

南北方向に伸びる尾根頂上部の平坦面に設定したトレンチである。尾根幅は約10m、長さ約20mの尾根で、平坦部の標高は約164m、丘陵裾からの比高差は約20mである。尾根筋に並行して、幅2m、長さ5mのトレンチを設定した。

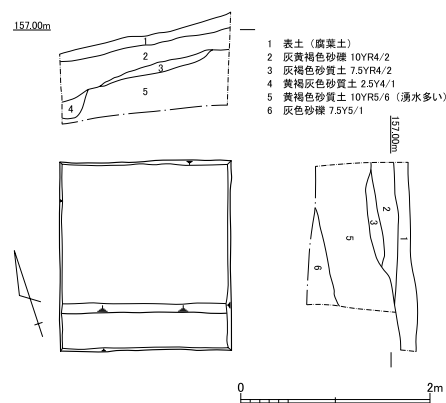


図3-7 Tr-2005 実測図

トレンチ南東隅で土坑 (SK-2001) を検出したため、規模や形状を確認するため、幅1mのトレンチを南へ2m、東へ1m拡張した。このほか、北端で長方形の落込み (SX-2002) を検出した。

検出した土坑やピット、落ち込みなどから約40点の弥生土器が出土したが、何れも小さな土器片であり、器種が判明する土器はわずかであった。

(2) 基本層序

表層は、厚さ5cmの腐葉土 (1層) が全面を覆い、その下に明黄褐色砂質土 (2層) が堆積し、風化花崗岩の地山 (4層) に至る。2層の明黄褐色砂質土も10~20cmの厚さであり、調査区は全体的に浅い。明黄褐色砂質土 (2層) から弥生土器片が出土した。

(3) 遺構

SK-2001 (図3-8)

トレンチ南東隅で検出した土坑である。長径が2.45m、短径が0.95mの楕円形で、底は北から南へ僅かに傾斜する。深さは25cmである。北端に径40cm、深さ12cmの円形ピット1基があり、そこから西壁に沿って深さ5cmの溝が巡る。北端で20cm幅の溝は、南へ次第に幅を減じることから、木の根の痕跡の可能性が高い。

土坑内の堆積土は褐色砂質土 (3層) 一層であり、弥生土器片が出土した。木の根の影響を受けて一部分の形状が不定形となる部分が認められるが、土層の堆積状況などから弥生時代に掘られた土坑であると判断した。

SX-2002 (図3-8)

調査区北端で検出した長方形の落ち込みである。検出範囲での長辺は3.0m、短辺は1.0mである。地山である花崗岩風化土のくぼみの中に砂質土層が堆積するもので、落ち込みの深さは30cmである。東側の長辺は急角度で落ち込むが、一部で不整形な張り出しが認められる。堆積土と地山との境目は明瞭に分かれ、底はほぼ水平であるが、南半では不整形な部分も認められる。小さな炭化物とともに、上面から少量の弥生土器片が出土したほか、サブトレンチ掘削時に黄褐色粘質微砂層から微細な土器片1点が出土している。

急角度の落ち込みや弥生土器が出土する状況から弥生時代の遺構の可能性も否定しきれないが、底の一部が不整形であることや地山の花崗岩とは全く異質な砂層が不整合に堆積すること、出土した土器は

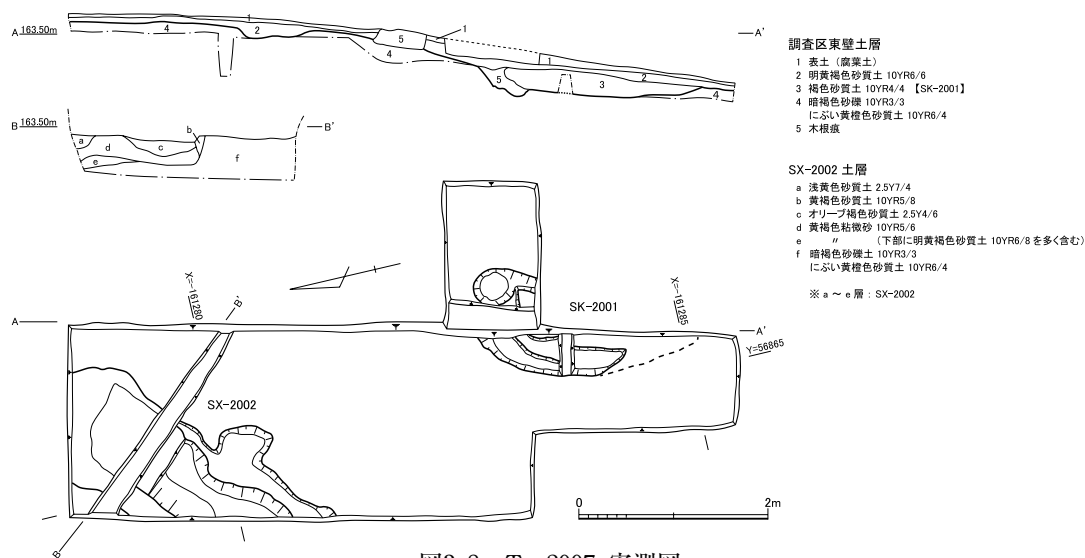


図3-8 Tr-2007 実測図

検出面の上面に多く、落ち込み内の堆積土から出土したものは極微細な土器片 1 点である。これらのことから、検出した土層の違いは花崗岩の岩盤の上に堆積する大阪層群の砂層との不整合面が地表に現れたものであり、そこに木の根などの影響により土器片が混入した可能性が高いものと判断した。

（4）遺物

弥生土器（図3-9 4）

図化できた土器は 1 点である。表土下に堆積する 2 層から出土した土器で、鉢あるいは甕の底部である。直径 4 cm の平底で、大きく開く体部は内湾して立ち上がる。外面はナデあるいは板ナデ調整で、体部下端にわずかに叩きを残す。

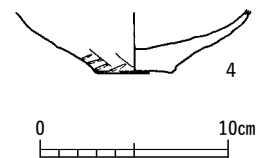


図3-9 Tr-2007 出土土器

7 Tr-2008・2008 拡

（1）調査区の概要

遺跡の東を画する急峻な尾根から南北方向に派生した尾根の頂上に開けた平坦部に設定したトレンチである。東の尾根と平坦部との境には、両地の間を画するような窪地が尾根を横断する。平坦部の標高は 166m で、窪地との比高差は約 2 m である。

尾根筋に並行して設定したトレンチは幅 2 m、長さ 6 m である。掘削直後より調査区全域で多くの弥生土器が出土し、当該期の遺構の存在が想定されたため、その性格や遺構の規模などを確認するため、幅 1 m のトレンチを北東方向へ 7 m、南西方向へ 3.7 m 延長した。また、柱穴の可能性が想定されたピット（SP-2008）の性格を確認するため、翌年度の調査で尾根頂上の調査区北辺を 9 m 幅で北へ 5 m 拡張し、Tr-2008 拡とした。

その結果、本調査区では弥生時代の竪穴建物跡（SH-2001・SH-2002）2 棟、ピット 5 基を検出した。5 基のピットの内、人為的に掘られた可能性が高い遺構は SP-2008 の 1 基であり、他のピットは抜根の痕跡などの可能性が高い。なお、SP-2008 は検出当初、柱穴の可能性があり、掘立柱建物の存在が想定

されたピットであったが、調査区を拡張した範囲ではこれに対応する柱穴は確認できなかった。

(2) 基本層序

尾根頂上では、厚さ5cmの腐葉土（1層）下ににぶい黄橙色砂質土（2層）が堆積し、その直下で風化花崗岩の地山が検出される。にぶい黄橙色砂質土（2層）も10cm程度の厚さであり、場所によっては当該層が存在せず、表土直下で地山が検出できる。一方、東尾根との境に存在する窪地に向かう傾斜面では、2層と地山の間ににぶい黄褐色砂質土層（3層）、明黄褐色砂質土層（4層）が存在し、地山の色調や土質に若干の変化が認められる。弥生時代の遺構は、地山面で検出した。

(3) 遺構

SH-2001（図3-11）

頂上の平坦部で検出した竪穴建物跡である。竪穴の平面が円形の建物であるが、検出した範囲は建物北半の半円形であり、南半は調査区外へ広がる。竪穴の直径は5.4m、深さ0.9mで極めて残りが良い。壁際には幅15cm、深さ4cmの周壁溝が巡る。円形掘方の柱穴2基（SP-2009・2010）を検出したが、これら柱穴の位置から調査区外に残りの2本が存在し、本来は4本柱と想定できる。検出した柱穴から復元できる柱間は1.9mで、柱穴の掘方は直径40cm、柱痕の径は20cmである。

また、床面北側区画では炉跡（SF-2001）1基を検出した。楕円形の平面は長径75cm、短径60cmで、わずかにくぼむ中央部の深さは2cmである。炉底は、被熱により赤く変色する。被熱範囲は、全体的に暗赤色を呈すが、その中に色調が異なる部分が数か所認められる。色調が異なる範囲は径10cm前後で、赤橙色や橙色を呈する。

また、これら床面で検出した柱穴や炉の上には多量の炭化材が堆積していた。炭化材は、太さ10～15cm程度の細長い棒状の材が多く、建物の中央から周壁に向かって放射状に広がる。さらに、それら炭化材の上で直径6～7mmの細い管状の炭化物の存在も確認できた。これらは、屋根に用いられた垂木や茅などの構造材と考えられ、このような検出状況は本建物が焼失建物

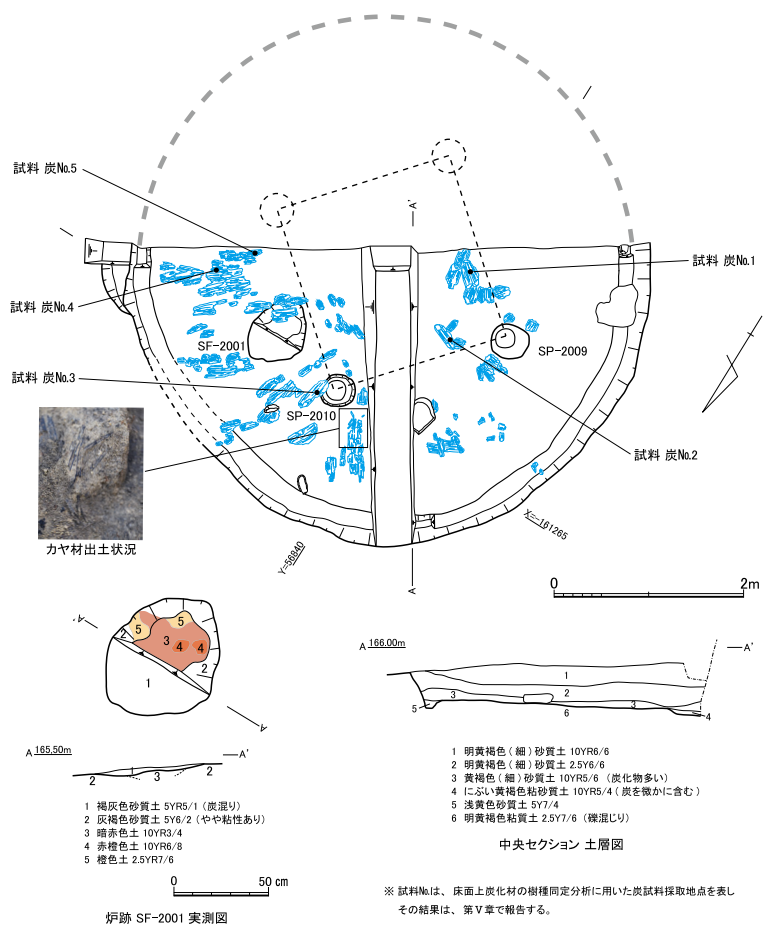


図3-11 SH-2001 実測図

であることを示唆するものと考えられる。

検出当初、建物北端の埋土の色調が異なることから、建物が埋まった後に掘られた土坑（SK-2002）が存在するものと想定し、遺構掘削を行った。しかし、遺物整理の段階で、それぞれの遺構から出土した遺物に接合できるものが多数存在したことから、最終的にいずれも竪穴建物の埋土であると判断した。なお、土坑として掘った埋土からは大量の弥生土器が出土している。これらの土器は、この建物が埋まる過程で、北側から一括して投棄された可能性がある。

炉跡の西側1.7m床面上には大きな台石が残されていたほか、埋土から敲石や砥石が出土した。敲石の中には、五斗長垣内遺跡の鍛冶工房で出土した鍛冶工具に類似するものが存在するほか、床面からは粘土が焼け固まった焼土塊が出土している。また、炉跡の被熱痕は五斗長垣内遺跡で確認されているⅣ類鍛冶炉の同心円構造に共通するものである。鍛冶作業に伴う鉄器が出土していないことから断定はできないが、鍛冶工房の可能性のある建物と評価できる。

SH-2002（図3-10）

尾根頂上部から東へ拡張した幅1mのトレンチ東端で検出した竪穴建物跡である。尾根頂上部から東の窪地へ傾斜する斜面に築かれた建物で、頂上部で検出した竪穴建物跡SH-2001との比高差は約1mである。壁の高さは38cmで、壁際には幅20cm、深さ7cmの周壁溝が巡る。建物が広がるであろう調査区南側の地表面は、周囲に比べてわずかにくぼんでおり、地表から建物の範囲が想定できる。調査区内で検出した範囲は、建物の極一部だけであり、平面形等は不明であるが、地面がくぼむ状況からは円形の竪穴建物跡であることが想定できる。

SP-2008（図3-10）

竪穴建物跡SH-2001の埋土を切って掘られたピットである。直径は90cmの円形で、深さは68cmである。粒子の細かな浅黄色砂質土を埋土とするが、断面では底から高さ約30cm、幅25cmの柱根状の土層を確認した。このような状況から竪穴建物などの柱穴の可能性も想定されたため、調査区を北へ拡張したが、対応する柱穴は確認できず、建物跡などの遺構の存在は確認できなかった。土器などの遺物は全く出土しておらず、時期を特定することはできない。しっかりと掘られた規模の大きなピットであり、人為的に掘られた遺構である可能性は高いが、現段階では単独のピットであり、性格は不明である。

（4）遺物

弥生土器

SH-2001の土器は出土層位から、床面出土（5、6）、下層埋土出土（7～24）、上層埋土出土（25～89）に分けることができる。前述のように、当初は竪穴建物が埋まった後に掘られた土坑（SK-2002）として取り上げた土器は、その後の検討により上層埋土出土土器と分類した。

SH-2001床面出土土器（図3-12 5・6）

5、6は床面出土土器である。5は長頸壺の頸部で、直立気味に立ち上がり、口縁部を欠く。残存高は10.5cmで、頸部径は10cmに復元できる。器表面は剥離しており調整痕の観察は困難であるが、外面中央部付近に横方向に走る1条の浅いくぼみが存在する。擬凹線が存在した可

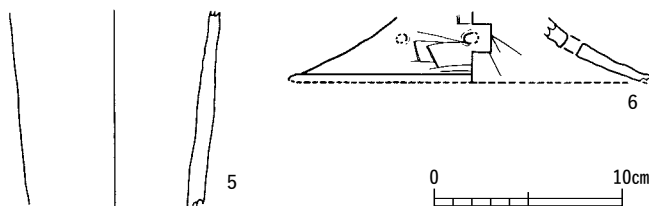


図3-12 SH-2001 床面出土土器

能性がある。6は高坏の脚部である。大きく開く脚部の裾で、端部はヨコナデ調整が施され、外面に浅い擬凹線が巡る。2か所確認できる円形の穿孔の間隔から、8か所穿たれていたものと考えられる。

SH-2001下層埋土出土土器 (図3-13 7~24)

7~24は、下層埋土出土土器である。7は壺の頸部である。直立する頸部から外反して開く。外反部内面に粘土紐接合部の剥離痕が残り、口縁部を欠く。外面には体部との境に凸帯が巡り、その上に2条の擬凹線を加飾する。外面はハケ調整である。

8~13は甕である。13以外は、「く」の字状に屈折して開く口縁部で、横方向のナデ調整で仕上げ、端部に面を有する。体部外面には叩きを残すものが多い。13は締まりが緩い頸部から短く外反して開く口縁部で、外面に縦方向、内面に横方向のハケ調整の後、横方向のナデ調整で仕上げる。13の口縁端部に弱い叩きの痕跡を残す。

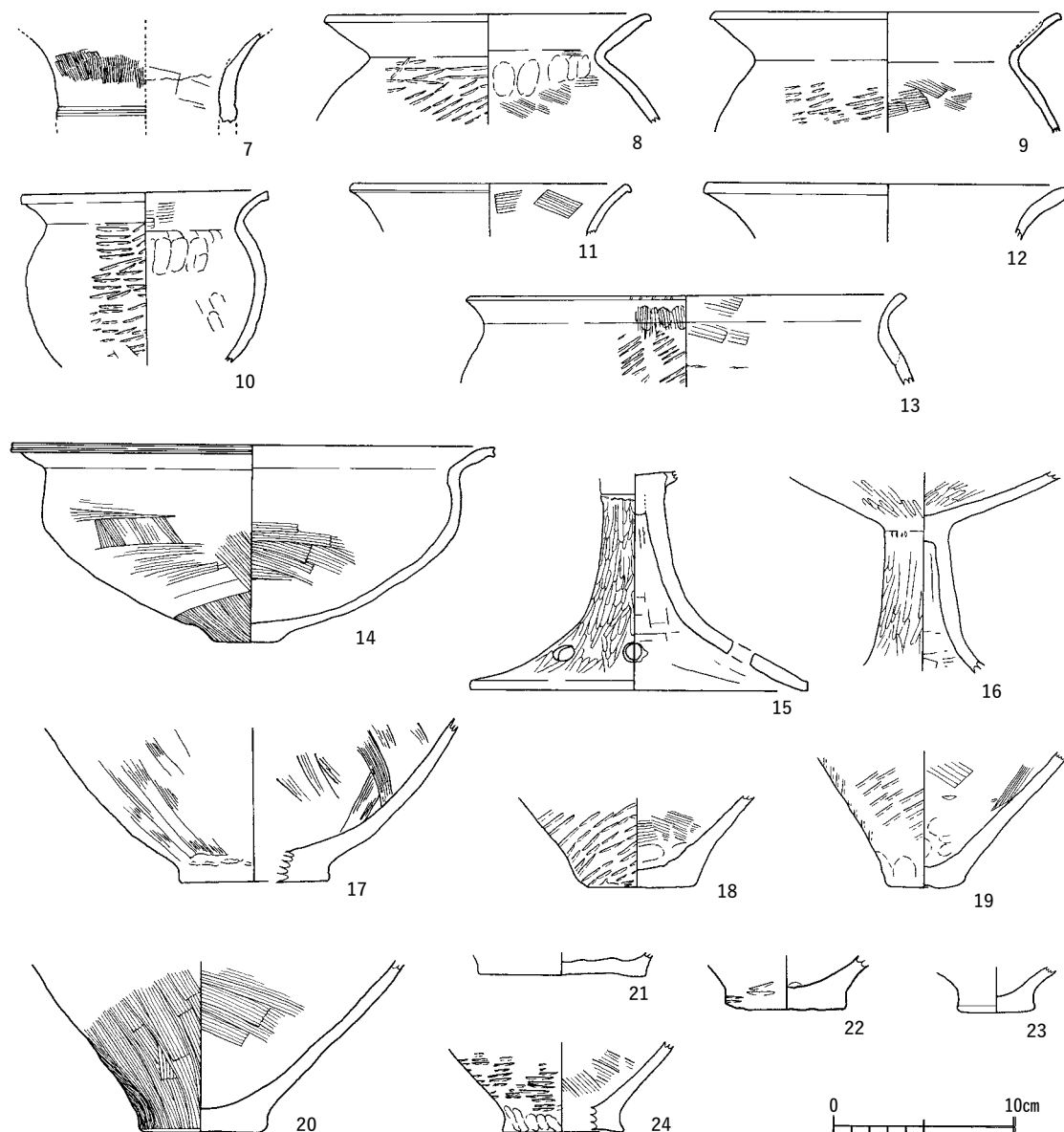


図3-13 SH-2001 下層埋土出土土器

14は内湾する体部から屈折して開く口縁部を持つ有稜口縁の鉢である。口縁部はヨコナデ調整で、端面に1条の擬凹線を巡らせる。口径が26.9cmの大型の鉢である。

15、16は高坏の脚部である。中空の脚柱部から、外反して大きく開く裾部を持つ。外面は縦方向のヘラ磨き調整である。15は裾部に円形の穿孔6穴を穿つ。端部はヨコナデ調整で面を有する。15の内面には絞り痕が残るが、16は横方向に削る工具痕が残る、成形技法に違いが認められる。さらに、16は他の多くの土器とは異なる白みを帯びた色調の土器で、砂粒の少ない精良な胎土であることから搬入土器の可能性もある。

17～24は底部である。17は底径7.6cmで、突出する大きな平底である。内湾する体部を有し、内外面をハケで調整する。壺の底部と考えられる。21も底径が9.2cmの大きな平底で、壺または鉢と考えられる。内面に体部との接合部が剥離した接合痕を残す。23は底径4.2cmの突出する平底で、17、21に比べて小型の底部である。体部は、大きく横方向に開く立ち上がりであることから、壺または鉢と考えられる。それ以外は甕の底部である。20は内外面ハケ調整であるが、それ以外は不鮮明な21、23を除き外面に叩きを残す。24は外面に指頭痕が明瞭に残り、指押さえによる調整が施される。

甕8と底部18は、同一個体と考えられる土器である。いずれも他の赤い土器とは異なる茶色を呈し、雲母を多く含む胎土の土器である。

SH-2001 上層埋土出土土器 (図3-14～16 25～89)

25～89は上層埋土出土土器である。その内25～35は壺であるが、いくつかの形式が存在する。広口壺29は、短く直立する頸部から外反して開く口縁部で、上下に拡張する端部は直立する面を形成する。上下端の強いヨコナデにより、端面中央部がかすかに突出することで、浅い擬凹線様のくぼみが生じている。頸部と体部との境目に、厚みの薄い凸帯が存在し、その上に刺突文が巡る。張りの強い体部は、最大径を中位に有する。底部は、周囲を指押さえすることにより突出する。体部外面はハケ調整、内面上半に指押さえの痕跡が明瞭に残る。体部から外反して開く25、26は、端部に面を持ち、1条の擬凹線を巡らせる。30も体部から屈折して立ち上がる口縁部であるが、外反度は弱く、体部の張りも弱い。おそらくは長胴形の体部になると想定できる。32も短く外反する口縁部である。端部を欠くが、内湾気味に上方へ摘み上げる。27、28は口縁端部を下方へ拡張するものである。端部が下方に垂下し、端面に27は2条、28は1条の擬凹線を巡らせる。28は、擬凹線の下に竹簡文を加飾する。31、33は短頸直口壺の口縁部である。頸部が強く締まる31は、口縁が外傾して直線的に立ち上る。端部はヨコナデ調整により直立し、外面に2条の擬凹線を巡らせる。33は、短く直立する口縁部で、体部に比して短い頸部となる。34は、細頸壺の頸部である。35は小型の壺体部で、外面はハケ調整の後、ヘラ磨きで調整するが、磨きは粗い。

36～49は甕である。口縁部は外面が縦方向のハケ、内面を横方向のハケ調整または板ナデ調整の後、横方向のナデ調整を施し、端部に面を持つものが多い。40は、端部をわずかに下方へ拡張し、弱い擬凹線2条を巡らせる。39、41、42、44の端面には、叩きが認められる。体部外面は叩きを残し、内面はハケ又は板ナデにより調整を行う。37、45は、雲母を含む胎土で、淡い褐色を呈する土器である。

50～61は高坏である。口縁部が屈折して立ち上がり坏部に稜を有する有稜高坏(50、53、54)と坏部が内湾して口縁部に至る椀形高坏(51、55、56)が存在する。有稜高坏は、口径に対し口縁部の立ち上がりが短いものが多いが、50は口径が縮小傾向にある。外反して開く脚部も低くなる傾向が認められる。内外面ハケ調整であるが、口縁と脚の端部に叩きを有する。53、54は強く外反して開く口縁部で、口径に比して口縁部の立ち上がりは短い。椀形高坏55、56は、内湾する体部から口縁部に至る形態で、坏部

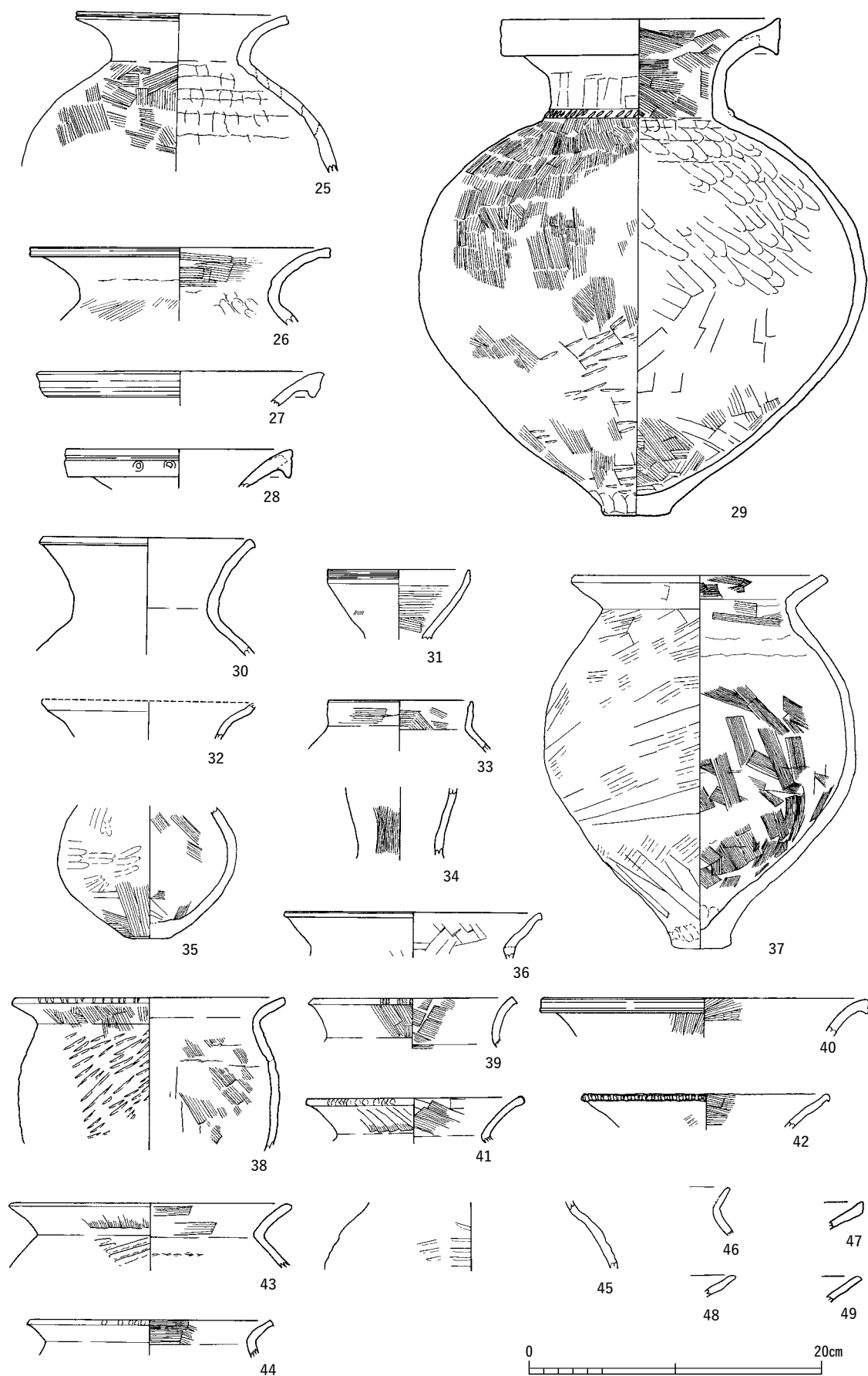


图3-14 SH-2001 上層埋土出土土器①

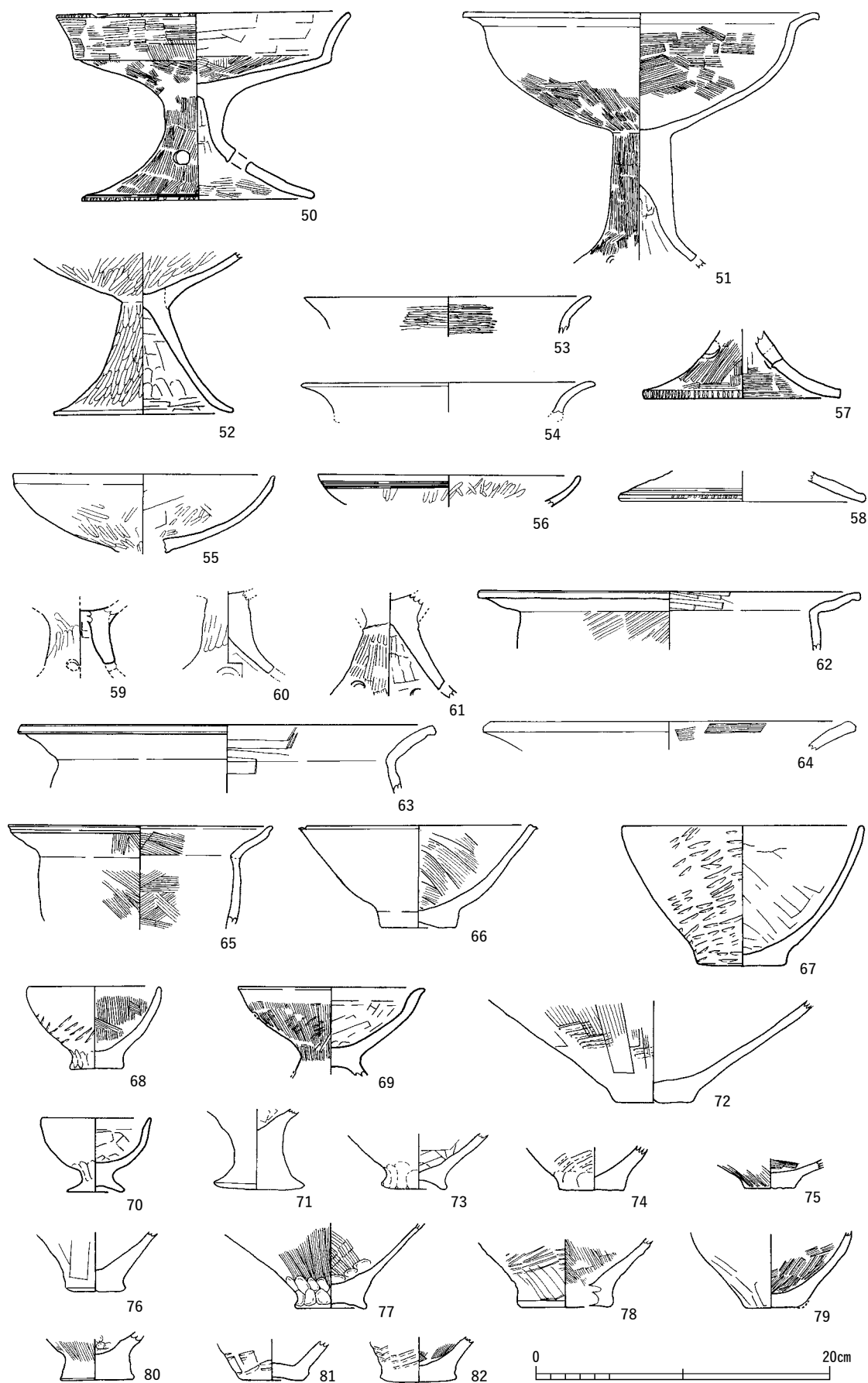


图3-15 SH-2001 上層埋土出土土器②

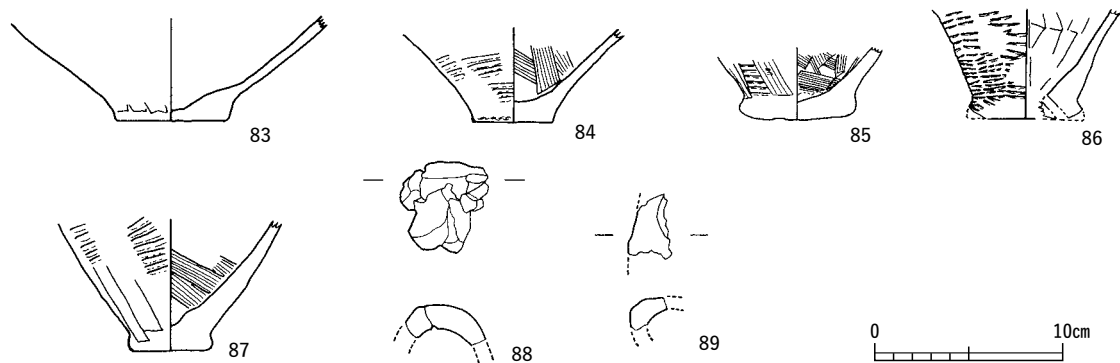


図3-16 SH-2001 上層埋土出土土器③

は浅めである。55は口縁端部にヨコナデ調整を施し、外面にわずかな面を形成する。一方、56は外面に2条の擬凹線が巡る。51は有稜鉢の底に脚を付けたような形態の高坏である。脚部は上半部が中実で、裾部は強く外反して開く。57～61は脚部で、中空のものが多く、60は上半が中実化する。いずれも脚高は低い。50に認められる脚端部の叩きは、57、58にも認められる。

62～71は鉢である。底部が平底のものと台付きのものが存在する。台付き鉢には、中実で丈高な脚台の71が存在するが、これらは『舟木遺跡Ⅰ』で低脚高坏として分類した器種に類似するものである。なお、71の底部外面には、3か所の靱圧痕が認められる。69も丈高な脚部となる。70は、小型の鉢である。また、口縁部が屈折して開き、体部との境に稜を有する有稜鉢は、62、63のように口径の大きなものが目立つ。これらの口縁部は外面に縦方向、内面に横方向のハケ又は板ナデ調整が施される。65はヨコナデ調整により口縁部を上方に摘み上げ、端部外面に1条の擬凹線を巡らせる。

72～87は底部であるが、壺又は鉢と甕に分けることができる。前者には、体部外面をハケあるいは板ナデにより調整するものが多く、後者には叩きを残すものが多い。甕とみられる86の底部には、斜め外方に貫通する径5mmの穴が穿たれている。

88、89は焼けた粘土の塊である。いずれも表面の一部に、管状の物質が接したようなくぼみが認められる。88は、小さな破片で出土した焼土の塊3片が接合できたものである。

SH-2002 出土土器 (図3-17 90・91)

90は広口壺の口縁部で、頸部から外反して開く。下方に肥厚する端部は丸みを帯びた面となり、2条の擬凹線が巡る。端面には一定間隔で円形のくぼみが認められることから、円形浮文が存在した可能性がある。91は有稜鉢の口縁部である。屈折して開く口縁部は、斜め上方に直線的に開き、内面の稜は弱い。端部には面を有する。内湾度の弱い浅めの体部で、外面には叩きが残る。

石器 (図3-18～21 S2～S12)

本調査区からは、敲石、台石、砥石などの石器が出土するとともに、それらと同じ材質の自然礫が多数出土した。使用痕が認められない礫についても石器として使用する目的で本地に持ち込まれた可能性もある。その内、本項で報告するのは、使用痕が確認できることから道具として用いられたと判断できるものである。

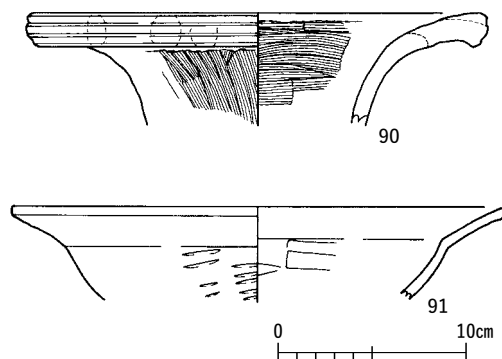


図3-17 SH-2002 出土土器

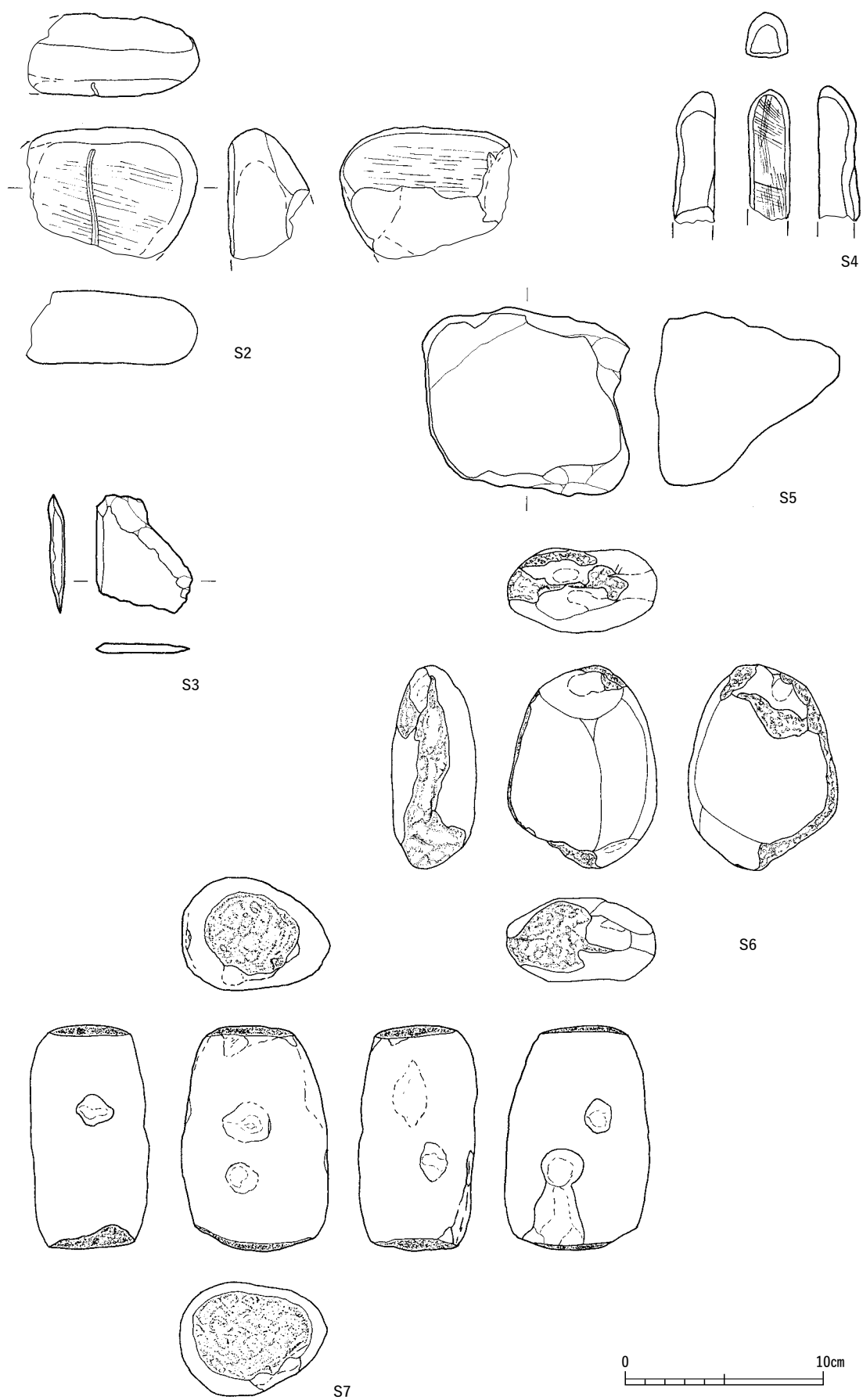


图3-18 Tr-2008 出土石器①

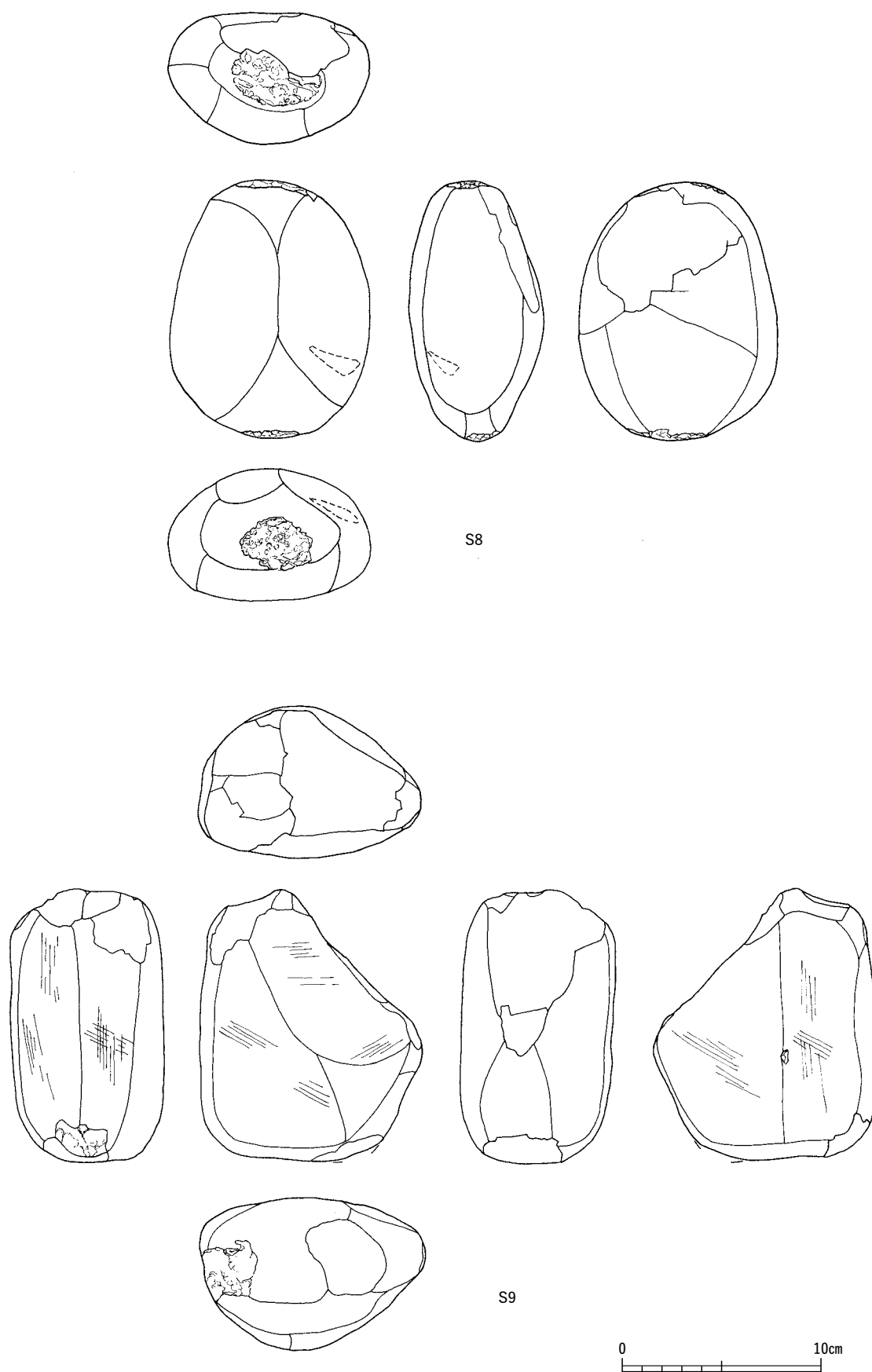


图3-19 Tr-2008 出土石器②

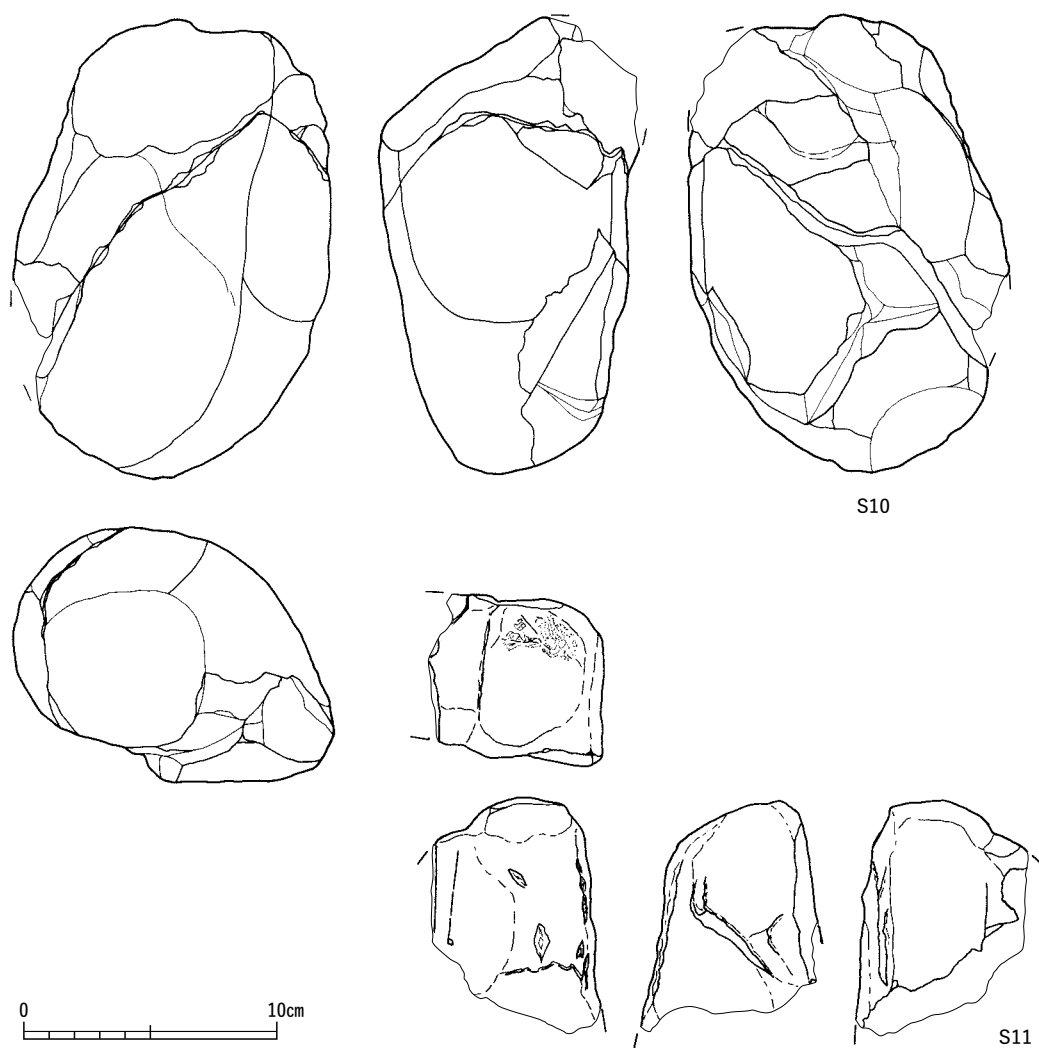


図3-20 Tr-2008 出土石器③

S2～S6及びS11は竪穴建物跡SH-2001の床面直上及び床面上に堆積する炭化物を多量に含む土層（図3-10 14層）から出土した石器で、それ以外は竪穴建物跡SH-2001の上層及び中層埋土（図3-10 8～10層）出土の石器である。器種は、敲石、台石、砥石などがある。

S2は砂岩製の砥石である。大きさは6.6cm×8.5cm、最大厚4.1cmで、角が丸みを帯びる扁平な礫の平坦な一面を使用する。この平坦面には長さ4.8cmの直線的な溝が1本存在する。溝の幅は約3mm、深さは約2mmで一定している。金属製の鋭利な刃物の先端で引っ掻いた傷のように見える溝である。S3の砥石も砂岩製である。厚さ7mmの薄い板状の石器は裏面が破損し、破面となる。上下及び側縁も折損しているため原形は不明であるが、元は長方形の薄い板状の砥石であったものと想定される。残存する表面及び一側縁は研磨に使用され、平坦な面を形成する。残存する二面の境は屈折して直線的な稜線を形成する。S4はホルンフェルス製の細長い棒状の石器である。断面が半楕円形を呈する平坦な一面を研磨に使用したとみられることから砥石とした。先端部及び背面は丸みを帯びる。太さ約2cm、全長6.5cmであるが、一端は折損している。S9も砥石あるいは磨石の可能性がある石器である。石材はホルンフェルス製の垂角礫で、角は丸みを帯びる。長さ13.5cm、幅11.2cm、厚さ7.6cmである。側面の一角が削り取られたように凹むが、その面は何かで磨ったような平滑な面となる。端部が一部破損するが、その他の面も平滑な面となる。

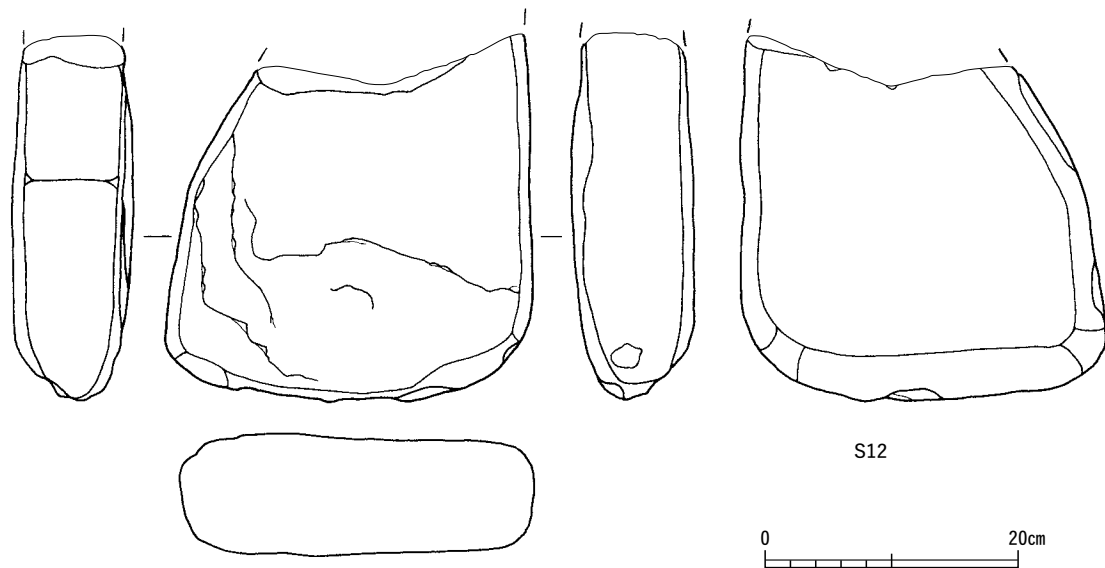


図3-21 Tr-2008 出土石器④

S5及びS12は台石である。S5の石材は、花崗岩である。9.5cm×10.2cmの正方形に近い形状の平坦面は石目が潰れ、平滑な面となる。断面は三角形で、裏面は先端が尖ることから、平坦面を上に向け、台石として使用するには、地面を凹ませて固定する必要がある形状である。平坦面以外は、凹凸が著しい破面となっていることから、本来はもう少し大きかったものが破損して現状の形となっている可能性もある。S12は斑礫岩又は角閃石岩製の台石である。竪穴建物跡の床面上で、平坦面を上に向けた状態で出土していることから、使用時の位置を保っている可能性がある。一辺が29.3cm×28.1cmの正方形に近い形状で、上端辺は破面となる。厚さ9.5cm、重さ10.52kgの重量感のある台石である。平坦な表及び裏面のほか、左右側面も平坦であることから使用面である可能性が高い。S10は、平坦部にわずかに凹みが認められることから台石として使用された可能性が高いが、軟質な流紋岩質凝灰岩製であることから砥石として用いられた可能性もある。長さ18.1cm、幅12.5cm、厚さ10.2cmの石器は、上端部が折損するほか、中央部で割れている。台石としての使用に耐えられず割れたことも想定できる。

S6は流紋岩質凝灰岩製の敲石である。長さ10.2cm、幅7.5cm、厚さ4.1cmの扁平な円礫を用いる。両端部にはわずかな凹みが認められる。両端部から左側面にかけて敲打痕が認められるが、柔らかな石材であることから、敲打部の損傷が激しい。S7は、斑礫岩又は角閃石岩製の敲石で、台石S12と同じ石材である。両端部が平坦な、やや扁平な円柱形を呈する。全長11.2cm、最大幅7.3cm、最大厚6.1cmで、重さが895.6gである。両端部には著しい敲打痕が残る。また、側面には直径が2cm前後、深さ5mm前後の円形の凹みが7か所存在する。3方向の側面では縦方向に並ぶように2個の凹みが存在し、残りの1側面にも1個の凹みがみられる。その内、裏面に刻まれた凹みは、円形の凹みから端面に向かって次第に幅が広がっていく溝状の凹みとなる。これらの凹みは、形状や深さが一定していないことから、意図的に穿たれたものではなく、敲打に伴う痕跡の可能性が高い。なお、同様の特徴を有する敲石が、後述するTr-2101でも出土している。S8はデイサイト製の敲石である。長さ13.0cm、最大幅9.9cm、最大厚6.7cmの扁平な円礫の両端部に敲打痕を有する。裏面に存在する破損面は、敲打に伴う衝撃により破損した可能性がある。S11は流紋岩製の敲石である。一辺が約6cmの四角柱を呈する形状は、一側面及び下端面は欠損するため、本来はもう少し大きな板状の石器であった可能性もある。丸みを帯びる先端の一部に弱い敲打痕を残す。平坦な側面は石目が潰れ、平滑な面となる。その中で破損した側面に接する表面

の一部に、顕著な石目の潰れが認められることから、台石として使用された石器が破損して、現在の形状になった可能性も残る。

8 Tr-2010

(1) 調査区の概要

尾根中腹の東向き斜面に設定した幅2m、長さ5mのトレンチで、斜面に直交する形で設定した。標高は155mで、堅穴建物跡SH-2001を検出した尾根頂上から斜面を11m下った地点である。

本調査区では、地表面下に無遺物の砂層が分厚く堆積し、地表下約2mの地点で炭化物を含む溝(SD-2002)を検出した。土器など時期を特定する遺物が出土しなかったことから、出土した炭化物の放射性炭素年代測定を行った結果、古墳時代の年代を得た。

(2) 基本層序

厚さ5cmの表土(腐葉土)下に、にぶい黄色砂質土(2層)からにぶい黄褐色中砂(10層)まで、粒子の細かな砂層が約1.2m～2mの厚さで堆積する。その下で円礫を含む暗灰黄色砂(14層)、灰黄色シルト質中砂(15層)が存在し、これら土層をベースとして溝(SD-2002)が存在する。

(3) 遺構

SD-2002 (図3-22)

斜面に直交して伸びる溝で、検出できた長さは2.4mであるが、さらに斜面下方に伸びる可能性がある。検出範囲での幅は60cmで、西半が調査区外に広がるが、本来の幅は1m以上あるものと想定できる。深さは40cmで底は船底状を呈する。3層に分かれる埋土の内、最下層に堆積する厚さ10cmの黄灰色シルト質細砂には多量の炭化物を含むが、土器などの遺物は出土しなかった。

同層から出土した炭化物の放射性年代測定から得られた年代は $1515 \pm 20\text{BP}$ 、 $1500 \pm 20\text{BP}$ であり、古墳時代の炭化物であることが確認された。この溝が人為的に掘られたものかどうかについては、限られ

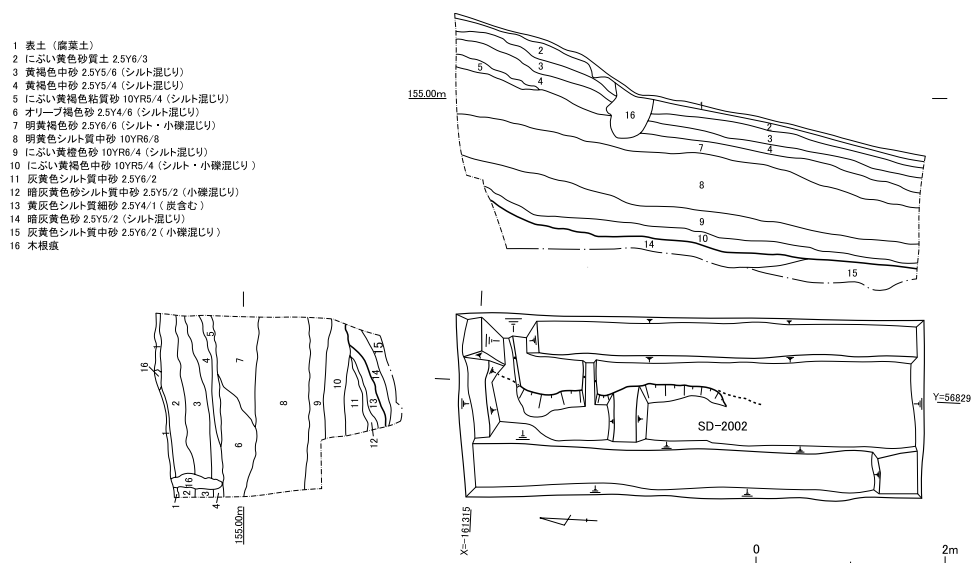


図3-22 Tr-2010 実測図

た調査面積の中での判断は難しく、当該期に人の活動があったものかどうかについての判断も今後の課題である。

9 Tr-2011

(1) 調査区の概要

Tr-2010から斜面を約4m下った標高151mに存在する平坦部に設定したトレンチである。斜面に直交する幅2m、長さ5mのトレンチであるが、地山を削平した落ち込みを検出したため、斜面上方に向かって幅1m、長さ2mを拡張した。

本調査区では、地山を掘り込んだ落ち込み3か所(SX-2003、2004、2009)を検出した。検出した落ち込みは、地山を構成する粘土あるいは粘質土を掘り込んで形成されている。形や大きさに規格性はなく、不定形な形状であることから段状遺構や竪穴建物などの遺構を構築する意図は感じられない。それらのことから、本地点で産出する粘土質の土を採取するために掘削した痕跡の可能性が高いものと推測できる。検出した落ち込みは、調査区南半のSX-2003、2009が、北半のSX-2004に先行することが土層断面で確認できることから、斜面下方から上に向かって掘り進められているものと想定できる。

なお、その時期は後述する落ち込みの状況などから出土した土器や放射性炭素年代測定で示される弥生時代の可能性もあるが、それら遺物がいずれも落ち込み最上層からの出土であることから、周辺で人が活動した痕跡のあるあらゆる時代の可能性があり、特定することは困難である。

(2) 基本層序

厚さ5～10cmの表土(腐葉土)下に、にぶい黄褐色砂質土(2層)、にぶい黄色砂質土(3層)が堆積し、地山に至る。2層からは弥生土器片が出土した。地山は粒子の細かな粘質土を基本としており、本地区の多くを占める花崗岩やその風化土である真砂土とは異なる。しかし、落ち込みの底で検出できる地山は、礫を含む砂質土であることから、粘質土下層では土質が変化していくものと考えられる。この地山を掘り込んだ落ち込み内には、何層かに分かれる砂質土や粘質土が重なって堆積する。これらの土層は、長期間をかけて徐々に埋まっていったものではなく、短時間に堆積した様相を呈しており、人為的に埋められた可能性も想定する必要がある。

(3) 遺構

SX-2003・SX-2009 (図3-23)

調査区南端から1.5mの範囲で検出した落ち込みである。検出時点での平面形は、隅丸方形を呈し、全体は調査区東壁から調査区外へ広がる。南半を掘り下げたところ深さは65cmで、底の形状は不整形であった。約20cmを掘り下げた時点で、西半にステップ状の平坦面が存在し、そこから西壁に向かって落ち込むSX-2009が存在する。検出範囲での深さは約30cmである。また、土層断面の観察では、SX-2003は2つの掘り込みが重複している様相が看取できる。その結果、SX-2009も含め、本調査区南半では数回行われた掘削が重複しているものと想定できる。

SX-2003の埋土は大きく4層に分かれ、最上層に堆積するにぶい黄橙色砂質土(4層)から弥生土器片と炭化物が出土した。なお、遺物が出土した最上層に堆積する土層と落ち込み内下層に堆積する土層の様相は異なっている。落ち込み内下層に堆積する土層は、比較的短時間に埋まった様相が看取できる

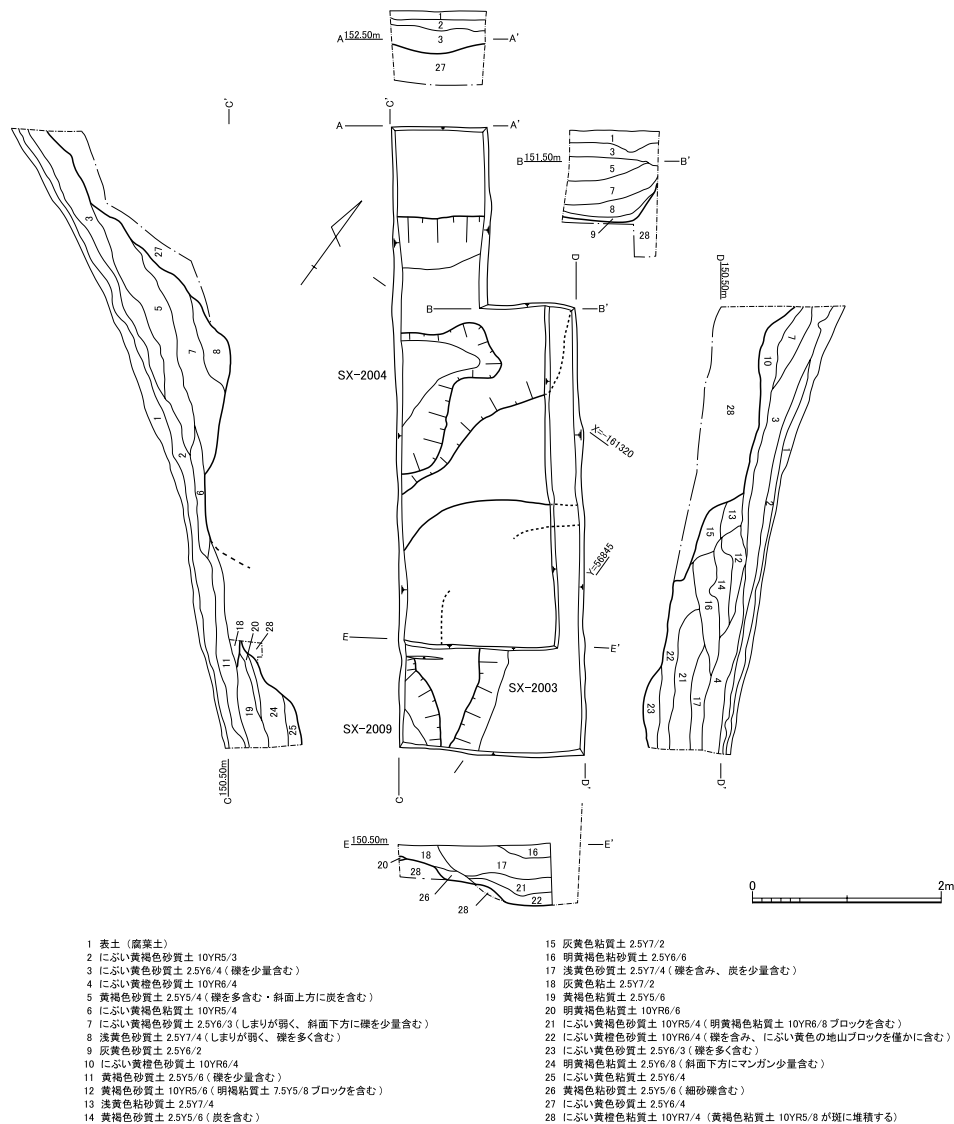


図3-23 Tr-2011 実測図

のに対し、最上層は徐々に埋まった自然堆積の様相が強いことから、下層の土層が埋まった後、斜面上方から流れ込んだ土が最上層に堆積した可能性もある。

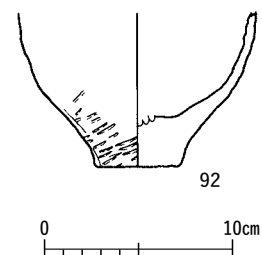
出土した炭化材 2 点の放射性炭素年代測定の結果は $1900 \pm 25\text{BP}$ 、 $1925 \pm 25\text{BP}$ であり、いずれも弥生時代の年代を得ており、それは出土した土器の年代とも一致するものである。しかし、これらの遺物は、いずれも落ち込み上層に薄く堆積した土層からの出土であり、これら落ち込みが埋まった後に斜面上方から流入して二次堆積した遺物の可能性は否定しきれない。したがって、これら落ち込みが掘られた時期は弥生時代の可能性も含めて、今後の課題としておきたい。

SX-2004 (図3-23)

調査区北半で検出した落ち込みで、北側の掘方は拡張したトレンチの範囲で検出した。斜面を掘削している幅は 3 m、深さは 1.5 m である。落ち込み底の形状は、SX-2003 と同様に不定形であり、堆積する土層は大きく 3 層に分かれる。調査区北壁断面で確認できる東側掘方は、垂直に近い角度で立ち上がっており、この落ち込みが人為的に掘り込まれたものであると考えられる。

落ち込み内に堆積する土層の堆積状況や形状の特徴などは、南半で検出したSX-2003に似ていることから、掘削時期に若干の前後関係は認められるものの、掘削の目的や性格は類似するものと想定できる。

この落ち込みから、土器などの遺物は出土しなかった。



(4) 遺物

弥生土器 (図3-24 92)

図3-24 Tr-2011 出土土器

出土した土器は小さな破片が多く、図化できた土器は1点である。表土下のにぶい黄褐色砂質土(2層)から出土した。厚みのある平底の底部から内湾して立ち上がる体部を持つ。外面には叩きが残る。甕の底部とみられる。

10 Tr-2012

(1) 調査区の概要

Tr-2011の南西約30mの斜面に設定した幅2m、長さ3mのトレンチである。調査地点の標高は149mである。他に比べて狭い調査区ではあるが、弥生土器の出土量は多く、当該期のピットを検出した。

調査区で検出できる地山面の傾斜角は約15°であるが、ピットを検出した調査区北西端は壁際から約1mの範囲が平坦な面となっており、出土した弥生土器も多くはこの範囲に集中している。この平坦面は調査区外へ広がっており、一定の広さを有することが想定できる。検出したピットは地山面から掘り込んでいるものと、地山上面に堆積する弥生土器を含む土層の上面から掘り込んだものが認められる。本調査区の平坦面は、当地点に地山斜面を成形した段状遺構などの弥生時代の遺構の可能性がある。

(2) 基本層序

厚さ5～10cmの表土(1層)下に、にぶい褐色砂質土(2層)、にぶい黄橙色砂質土(3層)、黄褐色砂質土(5層)が堆積し、地山に至る。地山は、小さな円礫を含むにぶい黄橙色粘質土(11層)である。調査区北西端の平坦面が検出できる範囲には、地山と5層の間に明黄褐色砂質土(6層)が存在する。5層、6層から弥生土器が多数出土した。

検出したピットは、5層上面から掘り込まれたものと、6層下の地山面から掘り込まれたものが存在する。

(3) 遺構

SP-2002 (図3-25)

調査区の北西壁際中央で検出したピットで、調査区外へ広がる。検出した範囲での平面は半円形で、直径は50cmである。深さは20cmで、底は平坦である。弥生土器片が出土した。

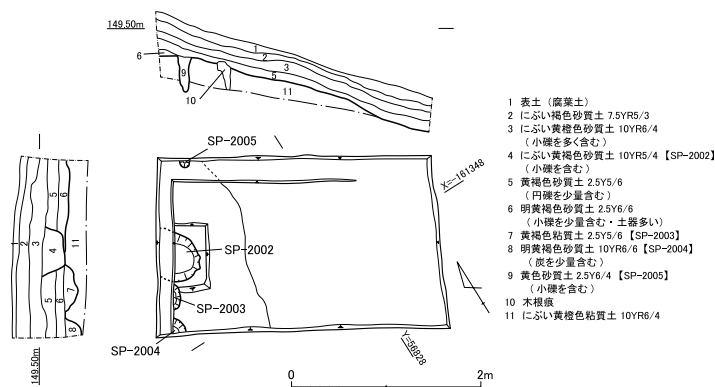


図3-25 Tr-2012 実測図

SP-2003・2004・2005 (図3-25)

いずれも調査区北西端に存在する平坦部の地山面で検出したピットである。SP-2003・2004は調査区北西隅で、2基が並ぶ形で検出した。SP-2003は平面が円形で、直径50cm、深さ15cmである。掘方はなだらかである。SP-2004は調査区外へ広がるため全体の形状や大きさは不明であるが、検出範囲での径は40cm、深さ20cmである。いずれのピットからも小さな弥生土器片が出土した。

SP-2005は北東壁際で検出したピットである。直径15cm、深さ30cmであるが、底に向かって次第に細くなっていく断面の形状から、木の根の痕跡の可能性もある。

(4) 遺物

弥生土器 (図3-26 93~104)

3層及び5層から出土した土器である。93~95は壺の口縁部である。いずれも体部から外反して開く口縁部で、93、95は端部に面を有するが、94は端部が丸く収まる。96は有稜鉢である。張りの無い直線的な体部から、斜め上方に直線的に開く口縁部で、端部は丸い。内面の稜は不明瞭である。

97~104は、壺又は鉢及び甕の底部や体部である。底部は、平底(98、100)と上げ底気味になるもの(97、102、103、104)がある。101は、中央がくぼむドーナツ状の形態となるもので、突出する底部の周囲を抑えることにより端部が丸みを帯びる。体部は下半に張りがあり、球形に近い形状になるものと想定できる。外面は叩きが残る。甕の底部と考えられる。99は、外面が縦方向のハケ調整で、壺の体部と考えられる。

11 Tr-2201・2202・2203

(1) 調査区の概要

東尾根の頂上部に設定した調査区で、調査地点の標高は200~202mである。平行する2本の尾根上

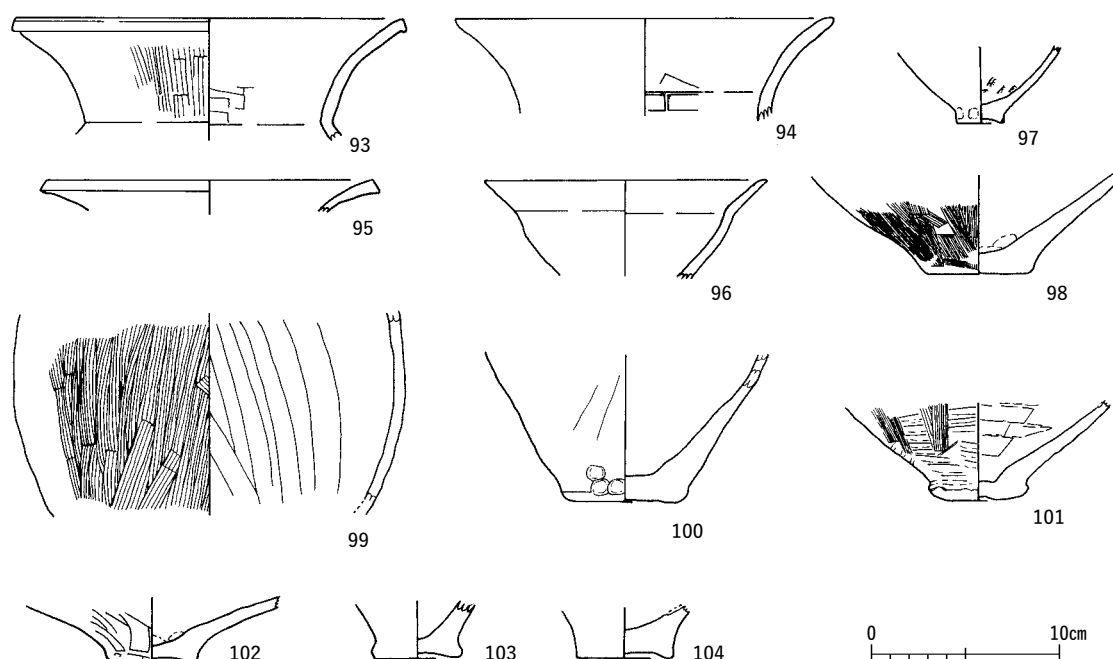


図3-26 Tr-2012 出土土器

に設定したTr-2201、2202とその間の谷筋に設定したTr-2203である。調査区は2 m×2 mを基本とし、遺構を検出したTr-2202は一边を60cm拡張した。

谷筋に設定したTr-2203で弥生土器の存在を確認したことから、当該期の人の活動が東の尾根上にも及ぶことが確認できた。また、尾根上の調査区Tr-2202では、炭化材や焼土が堆積する落ち込みを確認した。不定形な形状であり土器などの遺物が出土しなかったため落ち込みとして扱ったが、焼土や炭化材の出土状況から人為的な遺構であると判断できる。なお、炭化材を試料として実施した放射性炭素年代測定の結果、鎌倉時代と平安時代中期の年代を得ており、当該期にも人の活動があったものと想定できる。しかし、いずれの時期も土器などの遺物は出土しておらず、建物跡などの遺構も確認できないことから、居住地として利用された可能性は低いものと考えられる。

(2) 基本層序

尾根上に設定したTr-2201、2202では、腐葉土が堆積する表土（1層）下に花崗岩風化土（2層）が堆積し、地山に至る。地山は、花崗岩の岩盤や風化花崗岩の砂礫を基本とする。一方、谷筋に設定したTr-2203では、2層と地山の間に5層の土層堆積が確認でき、尾根から流れ込んだ土砂の堆積と考えられる。Tr-2203では、表土下の灰黄褐色砂質土（2層）から弥生土器が出土した。

(3) 遺構

SX-2201 (図3-27)

Tr-2202で検出した遺構である。調査区北西壁際から調査区外に広がるため、幅20cmの畔を残し、調

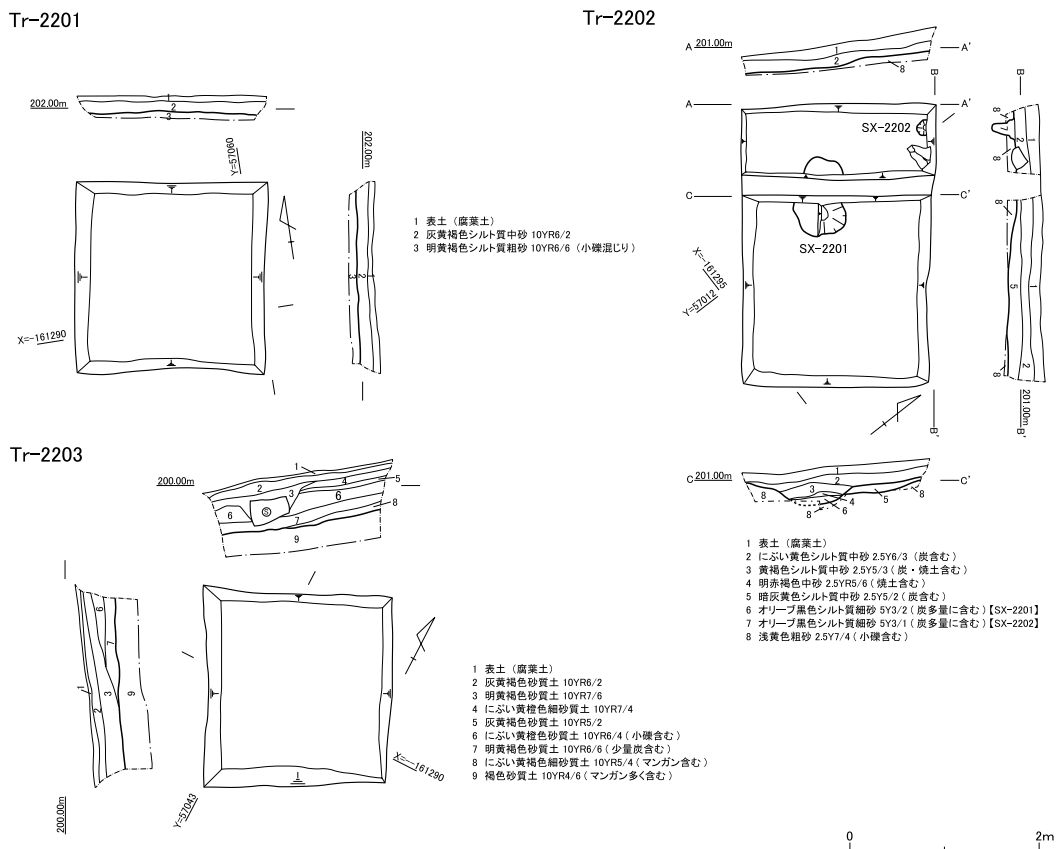


図3-27 Tr-2201・2202・2203 実測図

査区を拡張した結果、平面の長径が85cm、短径が78cmの遺構であることが確認できた。深さは20cmで、底は船底状を呈する。埋土は3層に分かれ、上層の黄褐色シルト質中砂には焼土や炭化物を含み、厚さ5cmの中層である明赤褐色中砂には焼土が多く、最下層のオリーブ黒色シルト質細砂は厚さ10cmで炭化材を多く含んでいる。

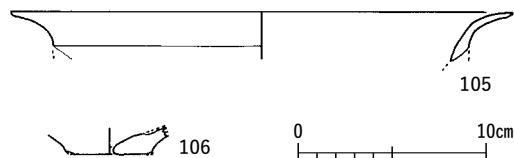


図3-28 Tr-2203・2206出土土器

出土した炭化材の放射性炭素年代測定の結果、 805 ± 15 BP、 865 ± 20 BPの結果が得られており、12～13世紀の年代が想定できる。なお、炭化材の樹種はいずれも針葉樹のマツ属複雑維管束亜属と同定されている。

SX-2202 (図3-27)

Tr-2202を拡張した範囲の東壁際で検出した遺構である。平面形は、直径は15～20cmの円形で、深さは25cmである。埋土には、多数の炭化物を含む。

出土した炭化材の放射性炭素年代測定の結果は、 1020 ± 15 BPの結果が得られており、10世紀末～11世紀前半の年代が想定できる。なお、炭化材の樹種は前者と同様に針葉樹のマツ属複雑維管束亜属であった。

(4) 遺物

弥生土器 (図3-28 106)

有孔鉢の底部である。底径4.4cmの平底底部中央に、円孔が1穴穿たれる。底部外面に、叩きが認められる。

石器 (図3-29 S13)

S13は、Tr-2201の灰黄褐色土（2層）出土の砂岩製の石器である。8.0cm×7.5cm、厚さ5.8cmの拳大の円礫を用いる。平坦な裏面に対し、背面は丸みを帯びる、断面が半円形を呈する礫である。下端部及び右側面は波面となる。丸みを帯びる先端部に敲打痕が認められることから、敲石と判断した。本調査区では、他に遺物が出土していないことから時期は断定できないが、隣接するTr-2002から弥生土器片が出土していることから、当該期の石器である可能性もある。

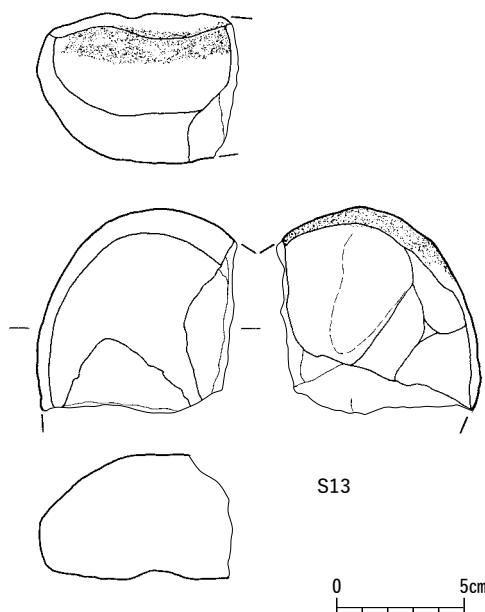


図3-29 Tr-2201 出土石器

12 Tr-2204・2205

(1) 調査区の概要

尾根頂上部から北の谷筋に向かって掌指状に伸びる尾根先端に設定した調査区である。調査地は、いずれも尾根上に認められる小さな平坦部を選定した。Tr-2204は標高202m、Tr-2205は193mの地点に位置する。

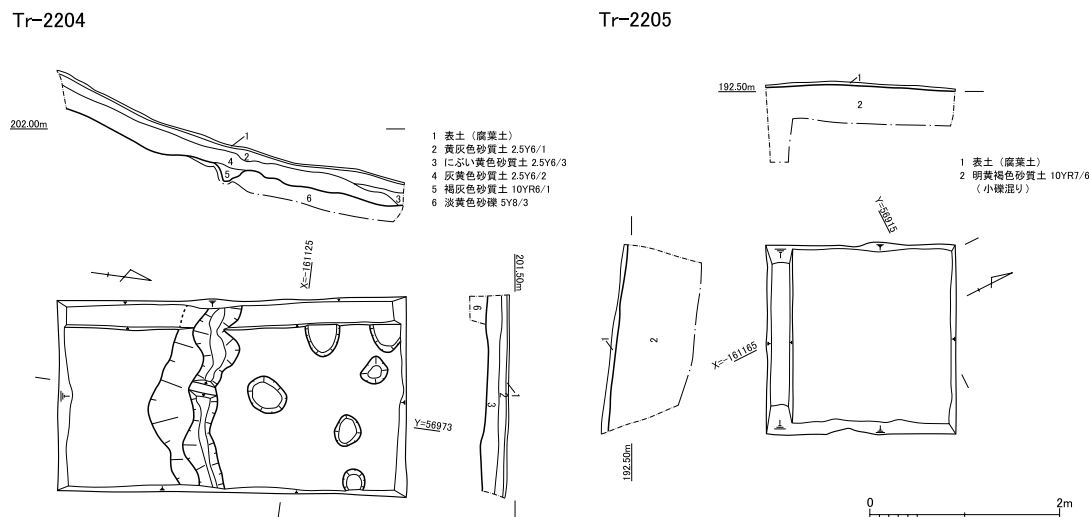


図3-30 Tr-2204・2205 実測図

Tr-2204は、斜面から平坦部にかけて設定した2×3.8mのトレンチである。斜面と平坦部の境で溝1条と平坦部で6基のピットを検出した。掘り込みを行った結果、何れも人為的な遺構ではなく、木の根の痕跡であると考えられる。遺物は出土しなかった。

Tr-2205は、2×2mの調査区である。表土下で花崗岩の岩盤が検出され、遺物、遺構ともに確認できなかった。

(2) 基本層序

Tr-2204では、腐葉土が堆積する表土（1層）下に花崗岩の風化土（2～3層）が堆積し、地山に至る。一方、Tr-2205では、表土（1層）下に地山が存在する。地山は、花崗岩の岩盤や花崗岩の風化土である。

13 Tr-2206

(1) 調査区の概要

竪穴建物跡（SH-2001）を検出したTr-2008の北側斜面裾に開ける平坦部に設定した2×2mの調査区である。調査地の標高は160mである。ミカンの古木が残ることから、元は果樹園として利用された段状の農地と考えられる。調査区最下層では、水平に削平された地山を検出し、上面で弥生土器が出土した。その上に堆積する土からも弥生土器が出土しており、弥生時代に斜面を削り出して構築した段状遺構や竪穴建物などの遺構が存在する可能性が高い。

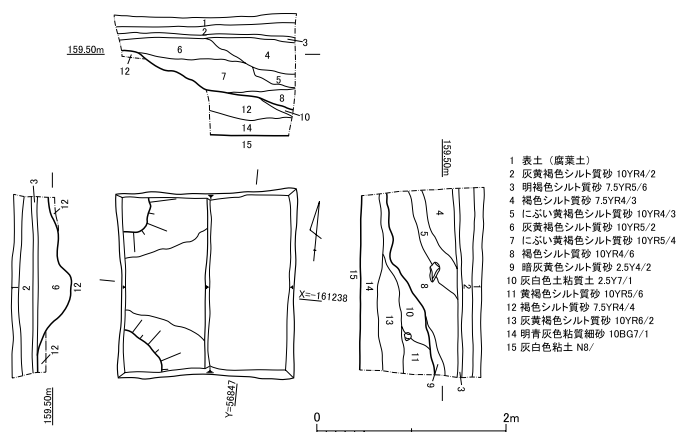


図3-31 Tr-2206 実測図

(2) 基本層序

表土（1層）下に旧耕作土とみられる灰黄褐色シルト質砂（2層）とそれに伴う床土である明褐色シルト質砂（3層）が存在することから、果樹園の前には水田として利用されていた土地であることがうかがえる。その下に堆積する土層（4～10層）は、調査区西壁際から北東隅に向かって傾斜する溝状の落ち込み内に堆積する土層で、弥生土器が出土した。調査区北壁面の土層では、4層、5層が6～10層を切って存在するようにもみえることから、2時期の堆積が存在する可能性もある。

溝状の落ち込みに切られる形で存在する黄褐色シルト質砂（11層）、褐色シルト質砂（12層）、さらにその下に堆積する灰黄褐色シルト質砂（13層）、明青灰色粘質細砂（14層）にも弥生土器を含む。その下で検出できる地山は灰白色粘土（15層）である。14層と15層との土質の違いが明瞭であるほか、地山面がほぼ水平であることなどを考慮すれば、竪穴建物跡の床面などの遺構に相当する可能性もある。そうであった場合、12～14層は遺構埋土ということになろう。その感が否めない土層の堆積状況を呈する調査区である。

(3) 遺物

弥生土器（図3-28 105）

有稜高杯の口縁部である。杯口径に比べ、口縁部は短く、外反度は強い。端部は丸く、面は有しない。杯底部との接合面で剥離し、破面には接合痕が残る。

石器（図3-32 S14・S15）

本調査区からは、敲石、砥石又は磨石とみられる石器が出土した。いずれも人為的に削平された可能性が高い地山直上に堆積する明青灰色粘質細砂（14層）から出土した。

S14は凝灰岩製の砥石あるいは磨石と考えられる石器である。高さ8.0cm、幅12.7cm、厚さ4.8cmの扁平な楕円礫の平坦な表裏面及び下端面が平滑であり、使用面とする。S15は砂岩製の敲石である。長

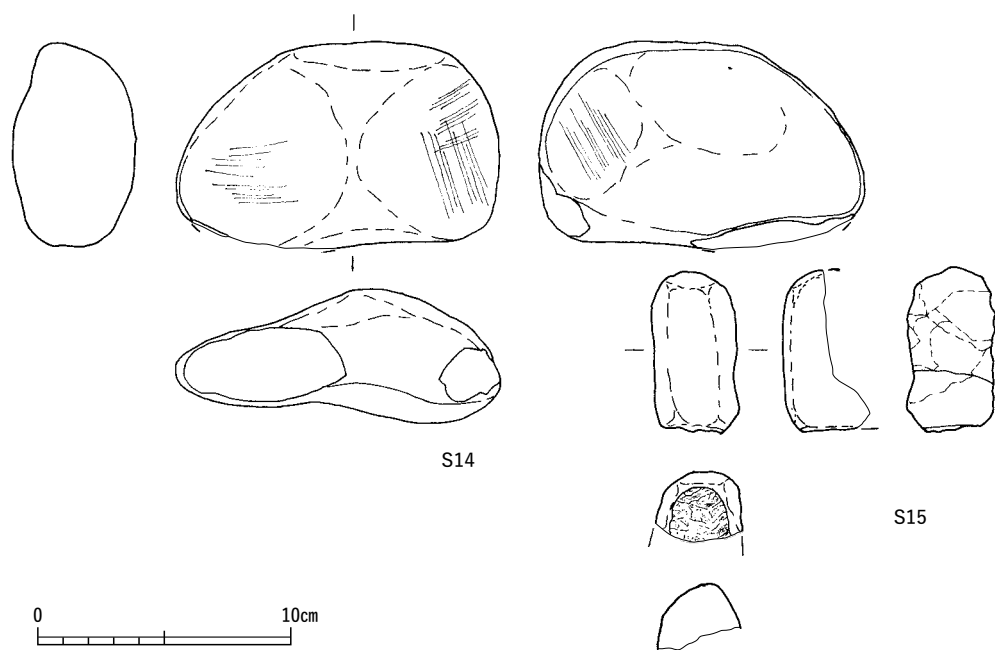


図3-32 Tr-2206 出土石器

さ6.0cm、太さ3.4cmの棒状の石器で、裏面が割れ、破面となる。下端部には径約2cmの平坦面が存在し、敲打痕が残る。

14 Tr-2207

(1) 調査区の概要

竪穴建物跡(SH-2001)を検出した尾根の北に谷を隔てて存在する尾根裾の水田に設定した2×2mの調査区である。調査区を設定した水田は、東西方向に伸びる尾根先端の緩斜面を削り出した棚田4段の内、最も先端に位置する低い位置の水田であり、標高は155mである。現在は耕作放棄されており、竹林となりつつある。

調査の結果、耕作土(1層)下で削平された地山が検出され、北東隅で深さ20cmの落ち込み(SX-2203)を検出した。いずれの層からも遺物は出土しておらず、人為的に掘られた遺構ではないと判断した。

(2) 基本層序

表土(1層)下に水田床土である明褐色シルト質砂(2層)が存在し、地山に至る。検出した落ち込みは地山面から落ち込み、落ち込み内にはにぶい黄褐色シルト質砂(3層)～明黄褐色シルト質粗砂(6層)が堆積する。地山は、花崗岩の風化土である。

15 Tr-2208

(1) 調査区の概要

調査範囲最北端に存在するTr-2007を設定した尾根の南斜面に設定した2×2mの調査区である。調査区を設定した地点の標高は160mである。現在は竹林となっているが、以前は水田として利用されていた土地である。調査区では、尾根の傾斜面を検出し、その上に堆積する弥生時代の遺物包含層の存在を確認した。

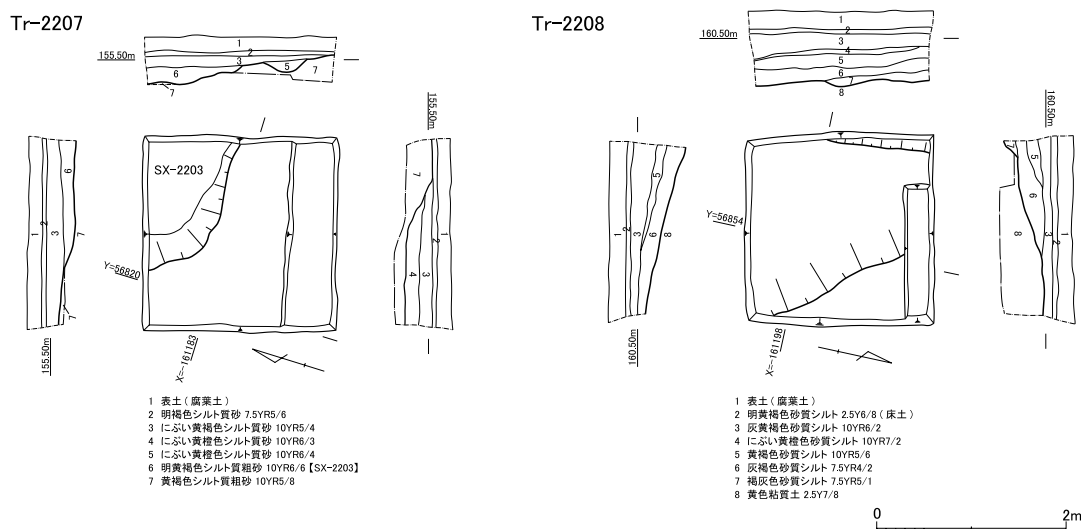


図3-33 Tr-2207・2208 実測図

（２）基本層序

水田として利用されていた時期の耕作土（１層）、床土（２層）下に灰黄褐色砂質シルト（３層）が存在する。調査区北東半では３層下で削平を受けた地山（８層）を検出する。地山は、調査区南西方向に傾斜しており、斜面上ににぶい黄橙色砂質シルト（４層）、黄褐色砂質シルト（５層）、灰褐色砂質シルト（６層）が順に堆積する。３～６層から弥生土器が出土し、３層には近世の土師器皿が混在する。６層は、弥生時代の遺物包含層と考えられる。地山（８層）は黄色粘質土である。

第３節 小結

弥生時代の集落範囲

A地区を対象とする今回の調査成果をまとめると、いくつかの要点がある。その一つ目が弥生時代の集落範囲に関してである。今回の調査では、当地区において弥生時代の竪穴建物跡２棟（SH-2001、2002）の存在を確認した。それによって、同時代の集落の範囲が遺跡の北東端に位置する当地区の山林部にまで広がることが確実となった。さらに当初想定していた遺跡範囲北限のさらに北に位置する調査区（Tr-2206、2208）においても同時代の遺物包含層を確認したことにより、集落範囲はさらに北へ広がる可能性が高い。

出土した土器の特徴から、その時期は後期後半期の舟木４～６期を中心とする時期である。これは、この集落が後期後半期に最大規模の面積となり、現在確認されている広大な遺跡範囲のほぼ全域に拡大していることを示唆するものである。このことは、弥生時代の集落の展開や舟木遺跡の性格を理解する上において重要な成果といえるであろう。

鍛冶工房建物の展開

二つ目は、鍛冶工房の展開についてである。今回検出した竪穴建物跡の１棟（SH-2001）は、鉄器は確認できなかったものの、検出した炉の状況や出土した石器の特徴などから鍛冶工房建物の可能性がある。そうであるとするならば、鍛冶工房は遺跡北端の地区においても営まれていることが確認されたものとなるが、さらに後述するK地区の調査成果を考え合わせるならば、それはほぼ確実であろう。このことは、後期後半期における鍛冶工房の広がりが広大な集落全域に展開していることを想定させるものとなり、鍛冶遺構を確認した当初、B・D地区を中心に展開すると予想していた範囲を超えるものである。

弥生土器の時期と特徴

三つ目は出土した弥生土器についてである。今回の調査で出土した土器の大半が弥生土器であり、それは概ね後期後半の範疇に収まるものであることが確認できた。一部、舟木３期の特徴を有する土器がみられるものの、大半の土器が舟木４～６期の土器であり、後期前葉（舟木１、２期）や終末期（舟木７～９期）の土器は確認できなかった。このことは、弥生時代の集落が後期後半に最大規模となり終末期には縮小していく傾向にあることを裏付けるものである。さらにそれは鍛冶工房の展開と軌を一にするものでもある。これは、弥生時代の集落の展開を理解する上で、重要な成果といえる。

なお、それらの土器は、一部に胎土の異なる土器がみられるもののその数は少なく、大半の土器が地元産とみられることが確認できた。そこから見える集落の閉鎖性は、鉄器生産を背景として集落規模が拡大し、広域的な交流が想定される状況に相反する特徴といえ、弥生時代の集落の性格を理解する上で

重要な視点になるものと考えられる。今後の調査の課題といえよう。

なお、弥生土器の大半は小さな花崗岩粒や石英、長石などの鉱物を含み、赤く発色する胎土の土器であり、この特徴を持つ土器が在地土器の典型例と考えられる。今回、その中に金雲母が目立つ淡い褐色を呈する茶色の土器が何点か確認できる。両者の製作技法に大きな違いは認められないことから遠く離れた地域からの搬入土器の可能性は低い、この違いが何に起因するのかは本遺跡の弥生土器や交流を理解する上での重要な視点となるものであり、今後も注視すべき視点といえよう。

石器の特徴

四つ目は石器についてである。出土した石器の大半は、敲石などの礫器であり、石鏃などの打製石器類は確認できなかった。これは、「舟木遺跡2」で報告している後期前葉に多くみられたサヌカイト製の打製石器類が、鉄器生産が始まる後期後半期には姿を消していくことを示しており、打製石器が担っていた利器が鉄器に置きかわっていくことを想定させる成果ともいえよう。

また、鍛冶具として用いられた石器に、角閃石を多量に含む角閃石岩あるいは斑縞岩が多く用いられていることも注目される。黒く、重量感のある石材を鍛冶具として選んでいるのであろうか。今後、鍛冶遺構の調査に際して、注意を要する視点といえよう。なお、その中に五斗長垣内遺跡で出土している鍛冶具に似た形状の石器が存在する。角閃石岩あるいは斑縞岩を石材とする敲石で、両端の敲打痕が顕著であり、側面に円形の凹みを有するものである。このような石器の存在も、鍛冶遺構を評価する上で一つの要件になる可能性があり、重要な成果といえよう。

弥生時代以外の遺構

最後に、五つ目として、弥生時代以外の人の活動痕跡についてである。今回の調査では、炭化物が出土する溝状遺構（SD-2002）や焼土が集積する土坑（SK-2103）、炭化物が堆積した落ち込み（SX-2201、2202）などの遺構を確認した。それらはいずれも、土器を伴わないという点が共通する特徴である。現段階で遺構の性格を特定するには至っていないが、科学分析の結果により出土した炭化物が、古墳時代や平安時代、鎌倉時代のものであることが明らかになっており、その時期にも人の活動があったことを想定できる成果となっている。これらの成果は、弥生時代の集落が姿を消して以降、この地がどのように利用されていたのかを知る重要な遺構であり、ひいては弥生時代の集落が営まれることになった理由を理解する上においても重要な要素となる可能性がある成果といえよう。